

K-709

西沼田遺跡関連発掘調査

報 告 書

1995

天童市教育委員会

西沼田遺跡関連発掘調査

報告書

序

本報告書は、国史跡「西沼田遺跡」の整備にあたって、より詳しい資料と情報を収集するため、平成7年度に国庫補助を受けて、天童市教育委員会が実施した、発掘調査の結果をまとめたものです。

国史跡「西沼田遺跡」は、天童市の西部、蔵増地区と矢野目地区の間の田園地帯に位置しております。昭和60年に山形県営三郷堰圃場整備事業の際に確認され、山形県教育委員会が調査主体となって緊急発掘調査を行った結果、掘立柱住居跡や多量の土器、木製農具、植物種子などが発見されました。そして、西沼田遺跡は、6世紀から7世紀の古墳時代後期の農村集落の姿を残す、考古学面、建築学面、古代史面などで大変貴重な遺跡であることがわかりました。

天童市では、昭和61年7月に国指定申請を行い、翌年1月に文部省より国史跡「西沼田遺跡」として指定を受け、約33,000m²を公有化してその保護に努めています。また、この貴重な遺跡の整備と、今後の活用を図るために、有識者による懇談会、西沼田遺跡整備検討委員会、同庁内会議等を開催し検討を重ねてきました。

天童市教育委員会では、平成6年度に国庫補助事業を受けて、西沼田遺跡とその周辺の発掘調査を実施し、遺跡内の木材残存状況や遺跡範囲の確認、周辺部の生産遺構の確認などに成果を収めることができました。

本報告書は、平成6年度に引き続き、西沼田遺跡の周辺に点在している類似の古墳時代の遺跡や、木材が埋蔵されているという情報のある場所について、平成7年度に国庫補助を受けて、天童市教育委員会が実施した、発掘調査の結果をまとめたものです。

調査を行った顕正塙遺跡からは、張り床状遺構や掘立柱住居跡、板状建築部材や多数の土師器片などを検出することができました。また、塙野目A遺跡からは、竪穴住居跡や溝状遺構、弥生土器片や土師器・須恵器などが発見され、西沼田遺跡が営まれた前後の時期の貴重な資料を得ることができました。

本書を、今後の文化財の保護活用や、調査研究活動にご活用いただければ幸いです。最後に、発掘調査に携わっていただきました川崎利夫さん、茨木光裕さん、村山正市さん、長南憲一さん、そして、発掘調査のためにご協力をいただきました地権者の皆様、三郷堰土地改良区、発掘作業員の皆様に深く感謝申し上げます。また、調査をご指導いただきました関係機関・各位に厚くお礼申し上げ、報告書発刊のご挨拶といたします。

平成8年3月

天童市教育委員会

教育長 横田光正

例　　言

1 本書は、国指定史跡西沼田遺跡の整備計画の一環として、周辺に点在する古墳時代後期の類似の遺跡等について資料収集のために、1995年に天童市教育委員会が行った発掘調査の報告書である。

2 調査は、1995年10月2日から1996年3月31日までの期間に行った。

3 調査体制は下記のとおりである。

調査主体　　山形県天童市教育委員会

調査担当　　山形県天童市教育委員会社会教育課

調査担当者

主任調査員 川崎 利夫（日本考古学協会会員）

調査員 茨木 光裕（日本考古学協会会員）

調査員 村山 正市（日本考古学協会会員）

調査補助員 長南 憲一（山形考古学会会員）

調査指導　　文化庁、山形県教育庁文化財課、西沼田遺跡整備検討委員会、山形大学教育学部

調査協力　　三郷堰土地改良区、調査対象区域内地権者

作業員　　西沼田愛こう会（林 愛子、大沼 モト子、林 ミヨ、小笠原たけよ、山澤 としみ、林 喜代子、林 オノエ、山沢 ヨシノ、佐藤 ツネ、佐藤 保子、佐藤 こう、大林 あさ子）

事務局　　山形県天童市教育委員会社会教育課

　　課長 伊藤 博明、課長補佐 長瀬 一男、主査 長谷川 武

4 本書の作成にあたっては、以下のように分担・執筆した。

I. 長谷川 武 II. 茨木 光裕 III. 茨木 光裕、村山 正市 IV. 川崎 利夫
図版は、茨木 光裕、村山 正市、長南 憲一が担当した。

また、編集は長瀬 一男、長谷川 武が担当した。

5 発掘調査及び報告書作成にあたっては、三郷堰土地改良区ならびに調査対象区域内地権者をはじめ 地区の方々から御協力をいただいた。

6 本調査の資料は、天童市教育委員会社会教育課で一括保存する。

目 次

序

例 言 目 次

| | |
|--------------------------|----|
| I 調査の経過..... | 7 |
| 1 調査に至るまでの経過..... | 7 |
| 2 調査の方法と経過..... | 7 |
| (1) 調査の方法..... | 7 |
| (2) 調査の経過..... | 9 |
| II 遺跡の立地と環境..... | 10 |
| III 調査の内容と成果..... | 12 |
| 1 第1調査区（西沼田遺跡北東樹園地）..... | 12 |
| (1) 調査の概要..... | 12 |
| (2) 遺構・遺物..... | 12 |
| (3) 考 察..... | 13 |
| 2 第2調査区（西沼田遺跡南東樹園地）..... | 14 |
| (1) 調査の概要..... | 14 |
| (2) 遺構・遺物..... | 14 |
| (3) 考 察..... | 14 |
| 3 第3調査区（順正壇遺跡）..... | 16 |
| (1) 調査の概要..... | 16 |
| (2) 遺 構..... | 19 |
| (3) 遺 物..... | 22 |
| (4) 考 察..... | 24 |
| 4 第4調査区（塚野目A遺跡）..... | 25 |
| (1) 調査の概要..... | 25 |
| (2) 遺 構..... | 29 |
| (3) 遺 物..... | 34 |
| (4) 考 察..... | 38 |
| IV 調査のまとめ..... | 39 |

挿図目次

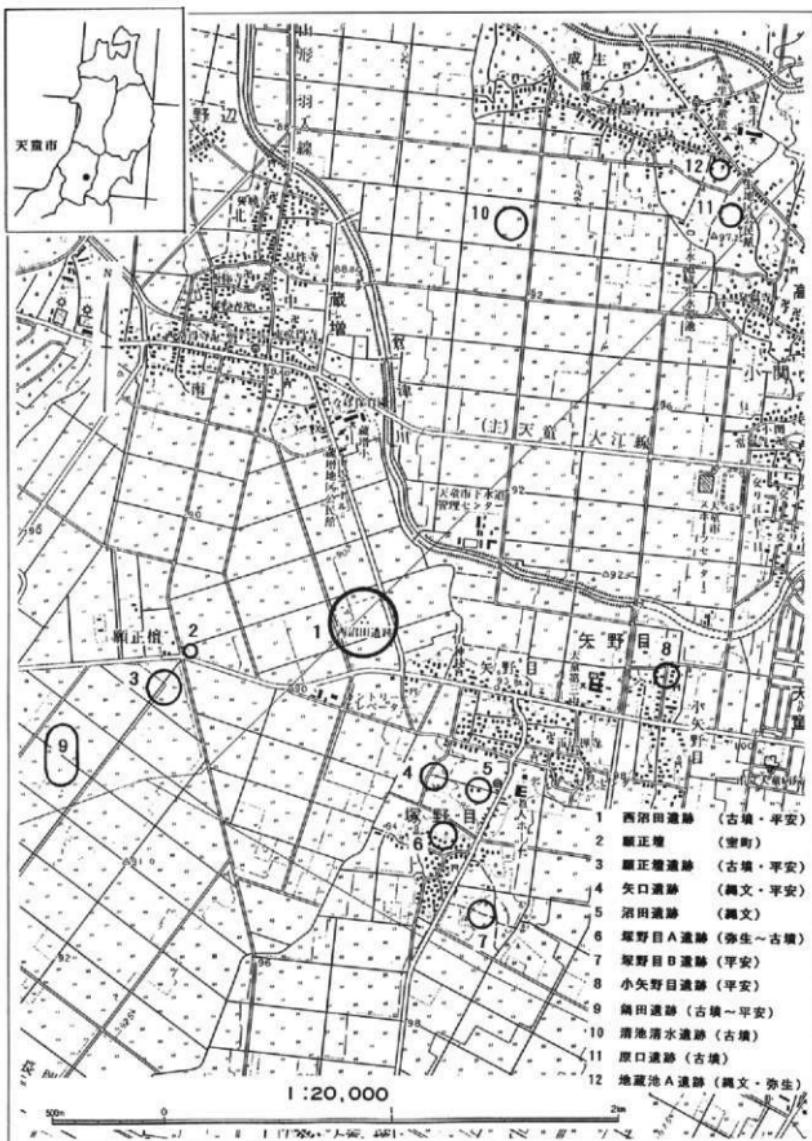
| | | |
|------|---------------------------|----|
| 第1図 | 西沼田遺跡周辺地図 | 6 |
| 第2図 | 調査区位置図 | 8 |
| 第3図 | 西沼田遺跡周辺遺跡立地図 | 11 |
| 第4図 | 第1調査区位置図 | 12 |
| 第5図 | 第1調査区テストピット3の土層断面図 | 13 |
| 第6図 | 第2調査区平面図及び土層断面図 | 15 |
| 第7図 | 願正塙遺跡全体図及びトレンチ配置図 | 16 |
| 第8図 | 第2トレンチ-3平面図及び土層断面図 | 17 |
| 第9図 | 第3トレンチ-3土層断面図 | 18 |
| 第10図 | 第2トレンチ-2平面図及び土層断面図 | 20 |
| 第11図 | 第2トレンチ-2柱穴土層断面図 | 21 |
| 第12図 | 出土遺物実測図 | 23 |
| 第13図 | 第4調査区(塙野目A遺跡)トレンチ配置図 | 25 |
| 第14図 | 塙野目A遺跡遺構図(昭和47年調査) | 27 |
| 第15図 | 塙野目A遺跡出土古式土師器及び弥生(天王山式)土器 | 28 |
| 第16図 | S T 6 堪穴住居跡 | 29 |
| 第17図 | S T 1 3 堪穴住居跡 | 30 |
| 第18図 | S T 1 5 堪穴住居跡 | 31 |
| 第19図 | S K 1 4 土壌 | 32 |
| 第20図 | S D 1、S D 2、S D 5、溝状遺構 | 33 |
| 第21図 | 第4調査区 第5トレンチ平面図及び土層断面図 | 35 |
| 第22図 | 塙野目A遺跡出土土器 | 36 |
| 第23図 | 鉄製品及び石製品 | 37 |

図版目次

| | | |
|-----|--------------------------|----|
| 図版1 | 西沼田遺跡周辺の航空写真(昭20年代 GHQ撮) | 10 |
| 図版2 | 第1調査区(西沼田遺跡北東樹園地)遠景 | 44 |
| 図版3 | テストピット3の精査 | 44 |
| 図版4 | テストピット3の土層断面図 | 44 |
| 図版5 | 第2調査区(西沼田遺跡南東樹園地)遠景 | 45 |
| 図版6 | 第2調査区の土層 | 45 |
| 図版7 | 第2調査区のピット | 45 |
| 図版8 | 第3調査区(願正塙遺跡)遠景 | 46 |
| 図版9 | 第3調査区表土剥ぎ作業 | 46 |

| | | |
|------|--------------------|----|
| 図版10 | 第3調査区第2トレンチ遺構検出作業 | 46 |
| 図版11 | 第2トレンチ内の住居跡 | 47 |
| 図版12 | 第2トレンチ柱穴と木製品及び根固石 | 47 |
| 図版13 | 第2トレンチ土層断面 | 47 |
| 図版14 | 第2トレンチ出土の木製品 | 47 |
| 図版15 | 第3調査区（願正塙遺跡）遠景 | 48 |
| 図版16 | 遺跡と作業の説明 | 48 |
| 図版17 | 第4調査区A区グリット配置状況 | 48 |
| 図版18 | A区出土の土師器（R P 4） | 48 |
| 図版19 | 第4調査区B区調査区の設定 | 49 |
| 図版20 | B区の表土剥ぎ作業 | 49 |
| 図版21 | 市職員研修の発掘作業(10月25日) | 49 |
| 図版22 | (左上)B区西側の遺構検出 | 50 |
| 図版23 | (右上)B区東側の遺構検出 | 50 |
| 図版24 | B区西側の溝状遺構 | 50 |
| 図版25 | B区SD5の土層断面 | 50 |
| 図版26 | B区SD1、SD2の土層断面 | 50 |
| 図版27 | B区SD9とST6の土層断面 | 51 |
| 図版28 | B区ST15の土層断面 | 51 |
| 図版29 | B区EP18及びST13 | 51 |
| 図版30 | B区SK14土層断面 | 51 |
| 図版31 | B区東側地山直上から出土した土師器 | 52 |
| 図版32 | 願正塙遺跡出土の土師器 | 52 |
| 図版33 | 願正塙遺跡出土の木製品 | 53 |
| 図版34 | 塙野目A遺跡A・B区出土の土師器 | 53 |
| 図版35 | 塙野目A遺跡A区出土の須恵器 | 54 |
| 図版36 | 塙野目A遺跡A・B区出土の赤焼き土器 | 54 |
| 図版37 | 塙野目A遺跡B区出土の鉄鐵 | 54 |
| 図版38 | 塙野目A遺跡B区出土の弥生土器 | 54 |
| 図版39 | 塙野目A遺跡B区出土の石製品 | 54 |
| 図版40 | 塙野目A遺跡A区出土の種子 | 54 |
| | 報告書抄録 | 55 |

第1図 西沼田遺跡周辺地図



I 調査の経過

1 調査に至るまでの経過

国史跡「西沼田遺跡」は、昭和60年に県営三郷堰圃場整備事業の際に確認された、6世紀から7世紀の古墳時代後期の農村集落の姿を残す貴重な遺跡である。

天童市では、昭和61年7月に国指定申請を行い、翌年1月に文部省より国史跡「西沼田遺跡」として指定された。併せて、指定区域約33,000m²を史跡等公有化事業により取得し、保存を図ってきた。また、西沼田遺跡の整備の方向について、昭和63年9月から有識者による検討を重ね、平成5年度からは西沼田遺跡整備検討委員会において話し合いを行っている。

この整備検討委員会の中で、昭和60年の緊急発掘調査後に埋め戻した住居跡等の建築部材の残存状況や遺跡分布範囲の確認、周辺に予想される生産遺構等の確認について話し合われ、平成6年度に、天童市教育委員会が主体となり発掘調査を行った。この調査で、建築部材の残存状況がわかり、また、畦畔状遺構やテフラ（十和田a；915年）が検出され、今後の遺跡整備のための情報を得ることができた。

整備検討委員会で、埋蔵文化財の保護・保存と今後の整備計画の調整に資するために、西沼田遺跡の周辺に点在する、他の古墳時代後期の遺跡について発掘調査を行うことが話し合われた。また、地権者からの聞き取りの中で、史跡周辺に木材が埋まっているとの情報もあった。これらを受けて、市教育委員会が主体となり、平成7年度の国庫補助事業として、顕正塙遺跡、塚野目A遺跡ほか2つの場所の発掘調査を実施した。

2 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

今回の調査は、西沼田遺跡の今後の整備・活用に資するため、木材埋没の情報のあった場所2か所と、周辺に点在している古墳時代後期の2遺跡の計4か所について実施し、資料の収集を行った。

- 1、第1調査区は、西沼田遺跡の北東約200mの果樹園地点。
- 2、第2調査区は、西沼田遺跡の南東約200mの果樹園地点。
- 3、第3調査区は、西沼田遺跡の西方北約1kmにある顕正塙遺跡。
- 4、第4調査区は、西沼田遺跡の南南東東約1kmにある塚野目A遺跡。

第1調査区は、木材埋没の情報のあった西沼田遺跡北東約200mに位置する果樹園地である。木材等の遺物や住居跡等の遺構の確認を目的として、11か所の試掘穴を設定した。

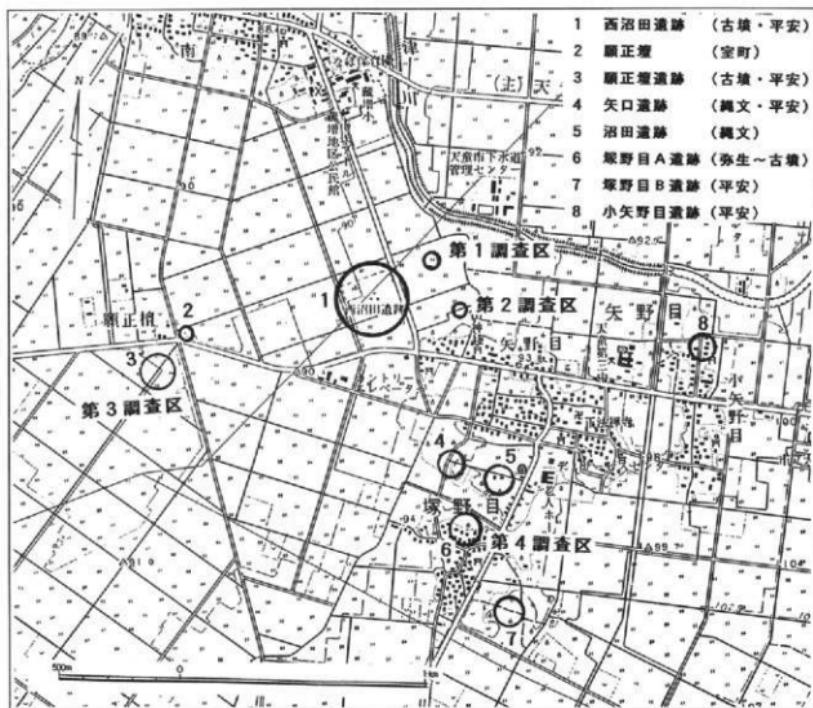
果樹栽培を行っているため、このうちの5か所を人力により掘り下げ、土層断面の観察及び精査を行った。また、ボーリング棒による調査も併せて行い、情報の収集に努めた。

第2調査区は、木材埋没の情報のあった西沼田遺跡南東約200mに位置する果樹園地である。木材等の遺物や住居跡等の遺構の確認を目的として、園地と道路の境界部に2m×1.3mの試掘穴を設定した。重機で表土を剥いだ後、人力により掘り下げて精査した。

第3調査区は、西沼田遺跡西方約1kmに位置する願正塙遺跡である。東西方向に1m×30mの3本のトレンチを設定した。重機により表土を除去した後、人力により掘り下げを行いながら土層断面等の精査・写真撮影等の記録を行った。併せて、ボーリング棒による調査も行った。

第4調査区は、西沼田遺跡南南東約1kmに位置する塙野目A遺跡である。A区、B区のふたつの調査区を設け、A区に4本、B区に1本、計5本のトレンチを設定した。果樹園・畑として耕作されているため、人力により粗掘りを行った後に掘り下げを行い、土層断面等の精査や、写真撮影等の記録作業を行った。

第2図 調査区位置図



(2) 調査の経過

調査を行うにあたり、平成7年7月15日に天童温泉ホテルつるやにおいて第4回西沼田遺跡整備検討委員会を開催し、西沼田遺跡関連調査についての指導を受けた。

9月7日に、西沼田遺跡関連発掘調査調査員会議を教育委員会会議室で開催し、発掘調査内容や方法、分担等について協議した。

10月上旬には調査区内の地権者の方へそれぞれ調査協力の説明を行い、協力を得ることができた。また、10月12日には調査作業員説明会を行った。

発掘調査は、10月16日から10月28日まで実施した。その後、12月17日に蔵増地区公民館において、発掘調査結果の説明会を行った。

平成8年2月6日に第2回の調査員会議を開催し、発掘調査のまとめ等について打合せを行った。

10月16日、安全祈願祭を三郷壇土地改良区碑前で行い、その後、第1調査区にグリッド設定作業を行った。11箇所の試掘穴を設定する。次に、第4調査区（塙野目A遺跡）にグリッド設定作業を行い、A区に東西方向に4本のトレンチを設けた。

10月17日は、第1調査区の発掘調査を行った。11箇所の試掘穴の内、中央部及び東西南北端の各試掘穴を人力により掘り下げ、土層断面の精査と写真撮影等の記録作業を行った。中央部のTP3より古道（幅約2m）が検出された。

10月18日午前中は、第2調査区を調査する。重機を使って表土を除去した後、人力により掘り下げて精査した。土留め用と思われる比較的新しい木材と地山から杭列跡が検出された。

10月18日午後から20日にかけて、第3調査区（顕正壇遺跡）の調査を行った。東西方向に3本のトレンチを設定し、重機で表土を除去した後、人力で掘り下げ精査を行った。第2トレンチから土師器、須恵器、赤焼き土器片が多く出土し、また、掘立柱式住居跡が検出された。

10月23日から28日にかけて、第4調査区（塙野目A遺跡）の調査を行った。23日～24日はA区に4本のトレンチを設け、人力により掘り下げ・精査作業を行った。さらにA区から南へ24mの地点にB区を設け、東西方向に1×20mのトレンチ1本を設定して25日から27日にかけて人力により掘り下げ・精査作業を行った。鉄鏃3片がB区から出土したほか、A・B両区から土師器・須恵器・赤焼き土器片が多く出土した。また、B区から竪穴式住居跡や溝状遺構、土壤等が検出された。

II 遺跡の立地と環境

今回調査を実施した各遺跡は、立谷川と乱川によって形成された、両扇状地扇端部前面に広がる、天童低地と呼ばれる後背湿地に分布している。西側に最上川が北流し、その自然堤防に挟まれた一帯は、標高約90mで、水田が広がり、県下有数の穀倉地帯を形成している。扇状地の扇端部に位置するこの地域は、倉津川、前田川などの河川や、樹枝状に流下する小河川が複雑に入り組み、洪水などによって流路が変化する、不安定な地形的様相を呈しており、扇状地扇端部を流れる河川に沿って、自然堤防の微高地が、帶状に分布している。この周辺には、排水の不良な低湿地が各所に広がっていたと考えられ、蔵増、矢野目などの集落や周辺の果樹園は、この微高地上に立地している。

耕地整理以前の航空写真によると、旧河道と考えられる樹枝状の痕跡や、水田部分のしみ状の濃淡が判読できる。水田部の濃淡は、土壤の乾湿状況を反映しており、濃色部は、土壤の含水率が高く、湿润な状況であったと思われる。西沼田遺跡や顕正塙遺跡は、比較的淡色部の乾燥した地域に立地していた状況が、航空写真等によって把握でき、周囲には湿润な地域が広がっていたと考えられる。

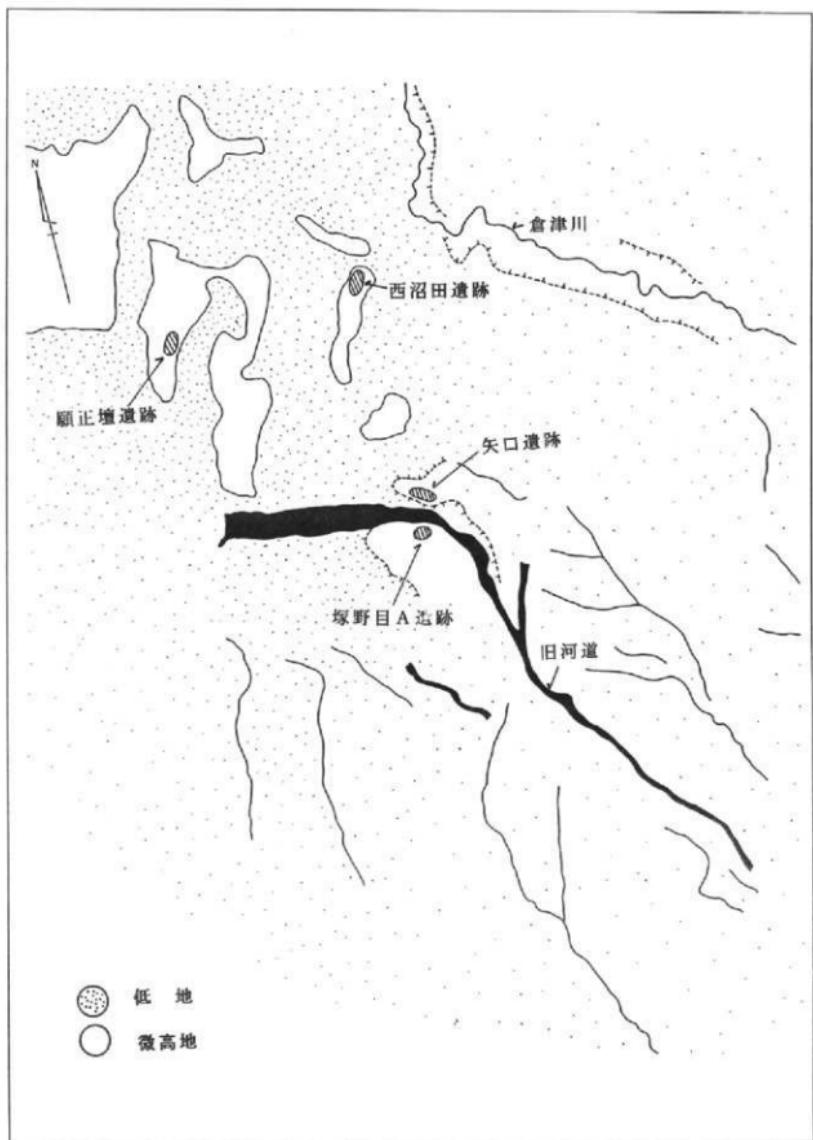
また、立谷川扇状地の扇端から西に連なる、比較的明瞭で大きな旧河道があり、現地でも確認できる。塙野目A遺跡は、この旧河道に面した左岸の舌状に張り出す段丘上に立地している。箱形石棺を内部主体とする塙野目古墳も、この旧河道の段丘上に営まれている。また、対岸の段丘には矢口遺跡がある。

この地域での遺跡の分布をみると、古墳時代前半段階までの遺跡は、河道に面した段丘上の微高地に立地し、それ以降は、沖積低地に進出する傾向が指摘できる。西沼田遺跡や顕正塙遺跡は、その沖積低地の比較的乾燥したわずかな微高地上に選地され、集落が営まれていたと考えられる。

図版1 西沼田遺跡周辺の航空写真（昭20年 GHQ撮影）



第3図 西沼田遺跡周辺遺跡立地図



III 調査の内容と成果

1. 第1調査区（西沼田遺跡北東樹園地）

(1) 調査の概要

本調査区は、西沼田遺跡北東約200mに位置し、平成6年度の西沼田遺跡発掘調査の際に、木材が埋蔵されているという情報のあった所である。また、高速道路東北中央自動車道が計画されている所でもある。標高は、91m前後を示す。

果樹園地内に、1m×1mの試掘穴を十字形になるように、11か所に設定した。このうち、5か所を人力により掘り下げ、土層断面等の観察や写真撮影等の記録作業を実施した。テストピット3は、幅1.5m×長さ4mで掘り下げた。また、ボーリング棒による土層状況観察を可能な限り行った。この調査区は、現在果樹園として利用されているところであり、調査の制約もあったが、可能な限り資料を収集した。

(2) 遺構・遺物

中央に設けたテストピット3より、表土下約20cmから、ほぼ東西方向に向かう幅約2m、3層の覆土遺構が検出された。このテストピット3における土層は、次のとおりである。表土に続き、第Ⅱ層は、暗褐色色粘質土。第Ⅲa層は、暗黄褐色細砂混じり粘質土。第Ⅲb赤褐色粗砂。第Ⅳa層は、暗黄褐色粗砂。第Ⅳb層は、青灰色粗砂（川原砂か）。第V層は、暗褐色細砂混じり粘質土となっている。

道路と思われる覆土遺構の土層は、F1が黄褐色細砂混じり粘質土。F2は、暗黄褐色粗砂。F3は、暗赤褐色粗砂混じり粘質土である。土層の一部に擾乱が確認された。

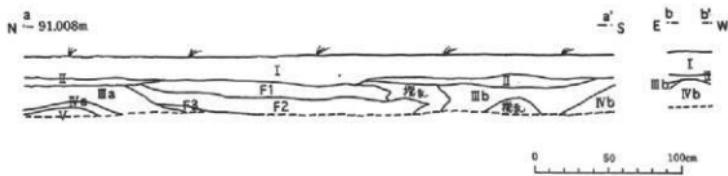
これらに伴う遺物の出土はなかったので、遺構の年代特定までには至らなかったが、観察の結果、覆土遺構は、比較的新しいもののように考えられる。

情報のあった木材等の遺構・遺物の検出はできなかった。

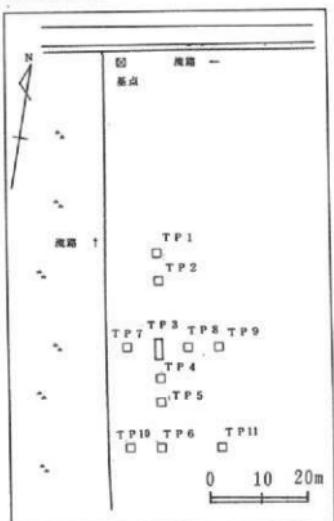
第4図 第1調査区位置図



第5図 第1調査区・テストピット3の土層断面図



第1調査区 テストピット配置図



- I 表土
- II 暗褐色粘質土
- IIa 暗黄褐色細砂混じり粘質土
- IIb 赤褐色粗砂
- IVa 暗黄褐色粗砂
- IVb 青灰色粗砂 (川原砂)
- V 暗褐色細砂混じり粘質土
- F1 黄褐色粗砂混じり粘質土
- F2 暗質褐色粗砂
- F3 暗赤褐色粗砂混じり粘質土

(3) 考 察

調査区及び周辺は、土地所有者の話等によつても、旧河道あるいは、すぐ近くを流れる倉津川の氾濫等により、湿地帯が形成されていたことが、考えられる。すなわち、湿地的古環境であり、古墳時代に住居を構える立地条件ではないことが考えられる。また、テストピット3から検出された覆土遺構は、古道と考えられるが、出土遺物がなく時代を特定するまでには至らなかった。観察の結果では、比較的新しいもののように見受けられた。

また、他のテストピットによる発掘およびボーリング棒による調査では、調査区一帯が湿润な状況であることがわかった。

2 第2調査区（西沼田遺跡南東樹園地）

(1) 調査の概要

本調査区は、矢野目地区北西端に位置しており、西沼田遺跡から、南東約200mの場所に位置する。微高地である段丘部と、東西に流れる旧川道の接する場所である。標高は、92mを示す地点である。

本調査区も、平成6年度の西沼田遺跡発掘調査の際に、木材埋蔵の情報があった所である。舌状台地の先端部であり、現在は果樹園と道路が接している部分である。現在の道路の下に、河川があったといわれている。

現在、耕作されている樹園地と、道路の境界部分に、南北方向に長い2m×1.3mの試掘穴を1か所設け、重機により表土（耕作土）と道路部分の盛土を除去した。その後、人力により掘り下げ、精査および土層断面の観察、写真撮影等の記録を行った。

(2) 遺構・遺物

本調査区は、発掘した段丘部の土層を観察すると、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層と、その下の地山である第Ⅳ層から構成されている。

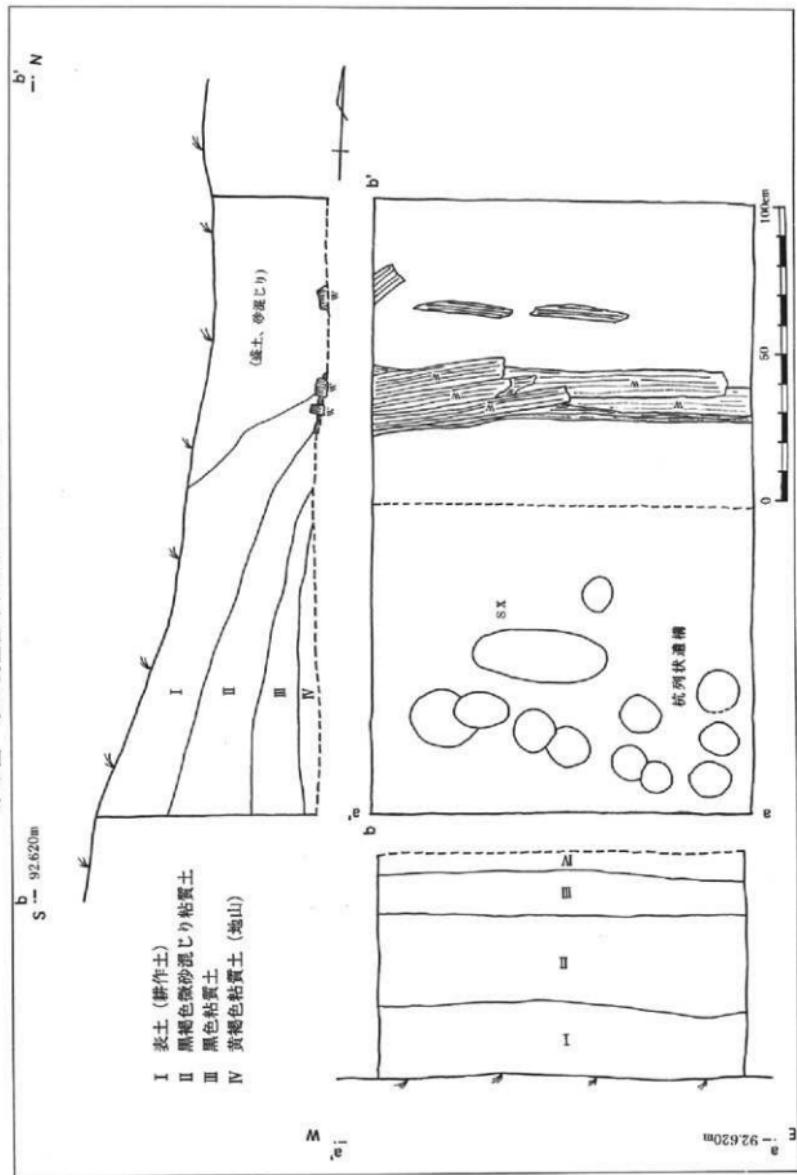
第Ⅰ層は、表土。第Ⅱ層は、黒褐色微砂混じり粘質土。第Ⅲ層は、黒色粘質土。第Ⅳ層は、黄褐色粘質土である。地表面下約40cmの耕作土と道路部分（盛土）の境界部分から、木材が検出された。栗材による木材で、刃物による削り跡があり、厚いものと薄い板状に加工されてるものがある。なかには、端が杭状に削られたものがあった。これらの加工木材は、段丘の端の部分に積み重ねられており、土留用として使用されていたと考えられる。地山である第Ⅳ層が途切れる北側のラインと、木材が検出された位置には、ずれがあり、第Ⅱ層の時代に、木材が積み重ねられたものと考えられる。

出土土器等を伴わなかったために、時代の特定までは至らなかったが、上記のことより、木材は、比較的新しいものと考えられる。また、段丘部の地山から、2列の杭列状遺構が確認されたが、この遺構の時代特定に結びつく遺物等の検出はできなかった。

(3) 考 察

段丘部と、東西に流れる旧河道に接する本調査区は、2列の杭列状遺構等からみても、古い時代から利用されていたと考えられる。南側に延びる樹園地は、舌状台地にあり、すぐ西側には田圃がひかれている。また、もう少し南側にいくと、縄文時代後期から晩期にかけての市の代表的な矢口遺跡がある。このことから、本調査区の微高地には、なんらかの遺構等の存在も予想される。この調査区に東西に流れている旧河道は、平成6年度に、西沼田遺跡関連調査で南調査区の第4調査区で発見された、水路を伴う規模の大きい畦畔状遺構の方向軸と一致するので、両者の関連性も考えられる。これらについては、さらに調査を進めることが、必要であると考えられる。

第6図 第2調査区平面図及び土層断面図

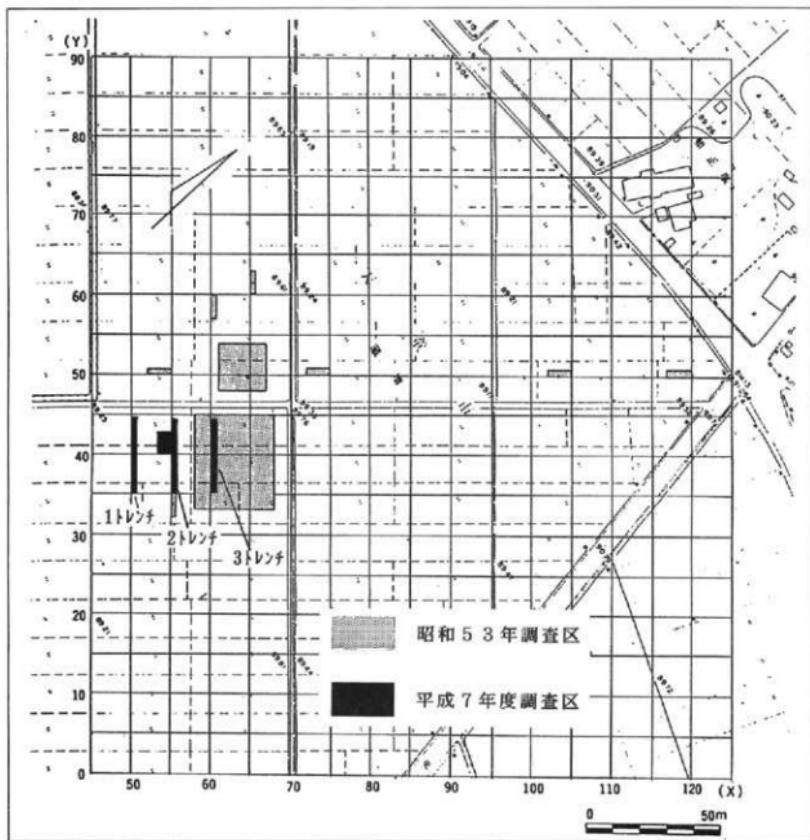


3 第3調査区（願正塙遺跡）

(I) 調査の概要

願正塙遺跡は、天童市大字藤内新田字街道下にあり、天童市街地西側に広がるいわゆる天童低地と呼ばれる後背湿地に立地する。遺跡は、一面の水田が広がる田園地帯の中に位置し、以前から周知されており、山形県遺跡地図（山形県教育委員会編 昭和53年）にもその所在が記載されている。昭和53年に、遺跡を含む当該地域一帯に県営圃場整備事業が施工されることになり、同年、山形県教育委員会が主体となって記録保存を前提とした発掘調査が実施された。

第7図 願正塙遺跡全体図及びトレンチ配置図

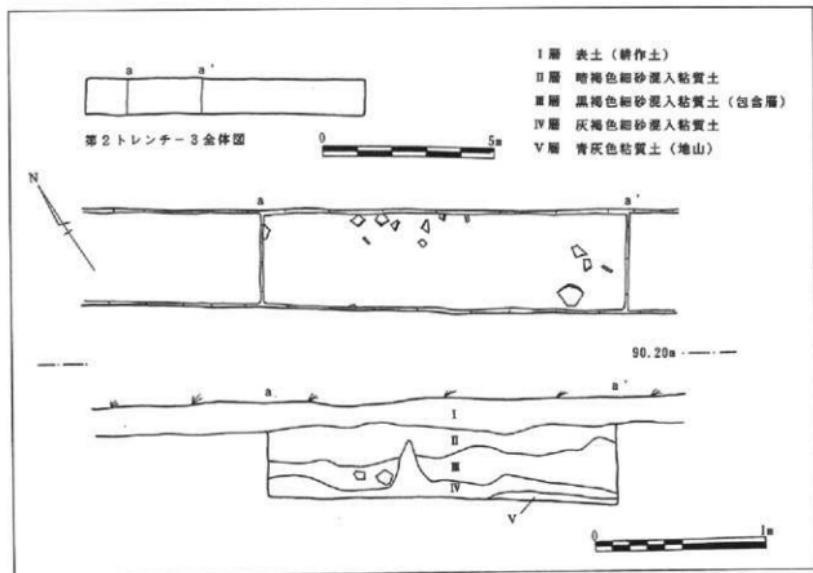


今次の調査は、昭和58年度調査時のB地区に隣接する南側の地域に、南から第1～3トレンチと称する3本のトレンチを設定し実施した。

各トレンチは、30m×1mで中間部にブリッジ状の未掘部分を残し、西側端部から1～4の小調査区を設けた。

表土は重機で除去し、調査区の状況に応じて、部分的に地山面まで掘り下げ、精査を行った。深掘を行った調査区は、2トレンチ-2のa～a'区間と3トレンチ-3のa～a'区間で、2トレンチ-2では、遺構が集中して確認されたため、南側に3m×5mの拡張区を設けて精査を実施した。

第8図 第2トレンチ-3平面図及び土層断面図



遺跡の層序は、基本的に3～5層に細分される。

深掘を行った2トレンチ-2および3トレンチ-3の層序は、

第I層 - 表土

第II層 - 暗褐色粘質土

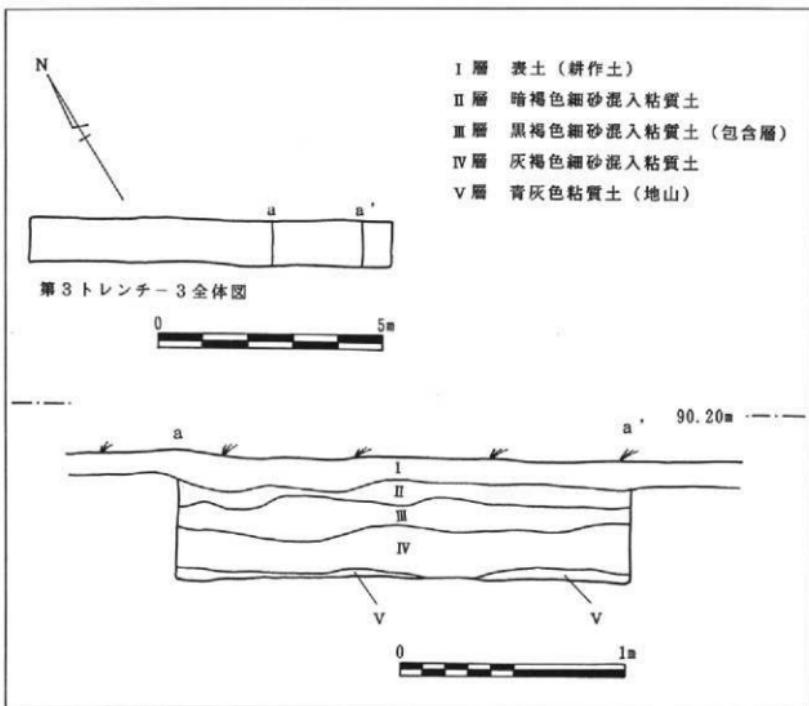
第III層 - 黒褐色粘質土

第IV層 - 灰褐色粘質土

第V層 - 青灰色粘質土（地山）

で、表土以下の各層に細砂を含んでいる。

第9図 第3トレンチー3 土層断面図



遺物は、表土からも磨滅した細片が若干量出土するが、主に第Ⅱ層下位から第Ⅳ層直上に含まれる。2トレンチー2調査区では、表土直下に黒褐色を呈する遺物包含層があり、第Ⅲ層が地山で、前記調査区で認められた第Ⅱ層および第Ⅳ層に対応する土層は、当該調査区では確認できない。

調査で検出された遺構は、2トレンチー2の調査区から建物跡を構成すると考えられる柱穴群、張り床状遺構などである。

また、出土した遺物には、土師器、須恵器、板状建築部材片などがあるが、2トレンチー3および3トレンチー3の深掘した調査区では、流れ込んだような状況で出土し、細片となって磨滅しているものが多い。

このような遺構や遺物の出土状況から、今次調査では、低湿地に立地した当該遺跡の様相と地形的な古環境を把握し得る多くの成果を得ることができた。

(2) 遺構

前述したように今次調査では、2トレンチー2の調査区から、建物跡を構成すると考えられる柱穴群と張り床状の遺構などが検出された。同トレンチでは、表土下に黒褐色の異物包含層があり、遺構は第3層の青灰色を呈し粘質の地山上面で確認された。第2層は、厚さ約8~16cmと比較的薄く、圃場整備等の工事に伴って削平されている可能性がある。

① 張り床状遺構

張り床状遺構は、トレンチ北壁にそって検出され、周囲の地山より粘性の強い黄褐色粘質土が、東西方向に連なり西側でコーナー状に屈曲する土色変化が認められた。その内部から板状の建築部材片が出土し、住居の張り床と考えられた。調査トレンチを拡張し、精査を実施したが、明確に張り床状遺構に帰属する柱穴は確認できなかった。

② 住居跡

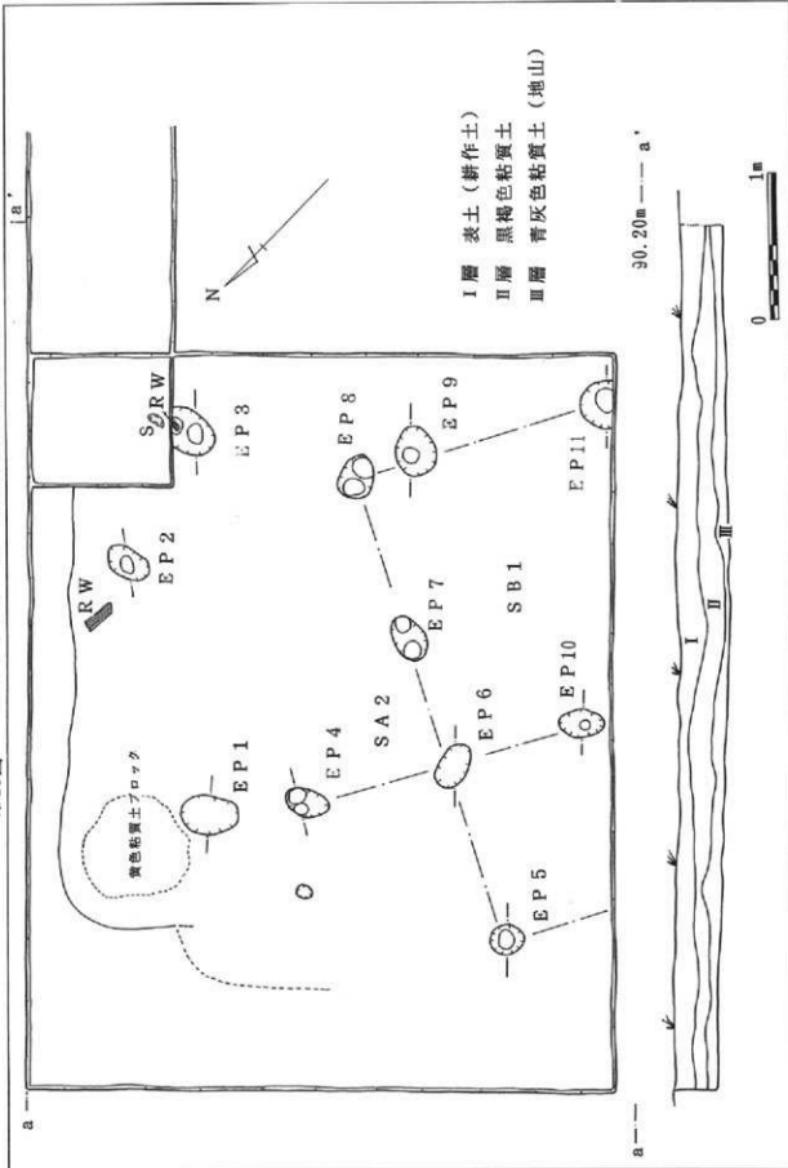
拡張区南辺で検出されたSB1は、EP5, 7, 8, 11によって構成される建物跡の一部と考えられる。全体の規模は調査区外のため把握し得ないが、東西2間、南北1間以上で、東西方向は長さ約3.3mである。柱間は一定せず、1.15m~2.1mを測る。柱穴は、径20~30cmの円形および楕円形を呈し、内側に黒色の柱根と思われるアタリがある。EP5では、径20cmの掘り方中央に断面円柱状の柱痕が認められるが、EP7, EP8では2箇所のアタリがあり、断面は先端基底部が円錐状を呈している。

③ 柱列

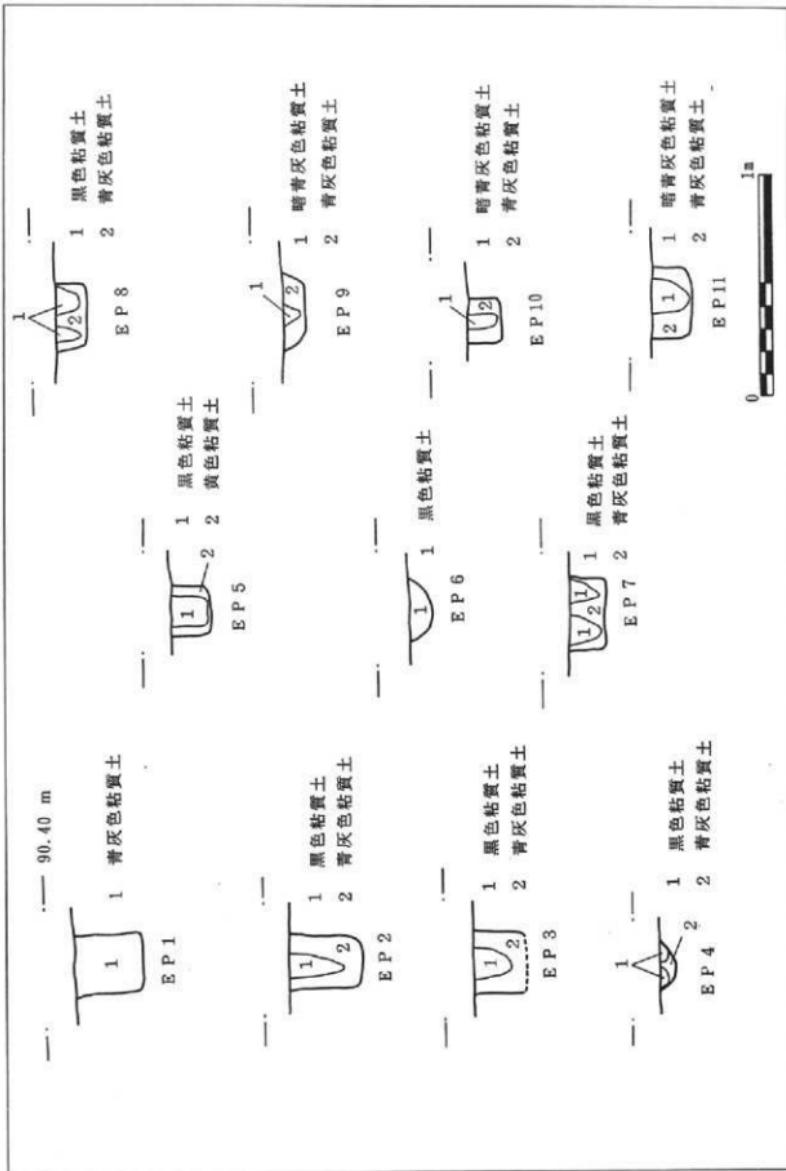
SA2は、SB1と重複する柱列で、EP4, 6, 10が同一のセットを成すと考えられる。SA2が建物の一部を構成する柱列であるかは、調査区が狭いため今次調査では確認できなかった。全長約2mで、柱間は1mの等間である。

この調査区では、ほかにEP1~3の柱穴も検出されたが、セット関係は捉えられなかつた。

第10図 第2トレンチ-2 平面図及び土層断面図



第11圖 第2トレッサー2柱穴断面図



(3) 遺 物

今次の調査で出土した遺物には、土師器、須恵器のほかに板状建築部材片や、数点の木質遺物があるが小破片である。また、自然遺物のモモの種子などもある。量的には土師器がその大部分を占め、須恵器は、壊の破片1点のみの出土であった。

① 土師器

土師器には、器種として、壊、高壊、甕、壺、甌などがあるが、いずれも細片で器形の全様を把握できるものはない。最も多く出土している土師器は、各器種の口縁部や体部の形態的な特徴から数タイプに分類することができる。

第12図の出土遺物実測図のうち1から7までは、すべて土師器で、第2トレンチの2調査区より出土したものである。

壊では、口縁部がやや内湾しながら立ち上がるも（第12図-3）、体部中央やや下位に段をもち、屈曲して口縁部が外反、外傾する例（第12図-1）、段の形成が明瞭でなく、体部中央下位に稜をもつもの（第12図-4）などが認められる。

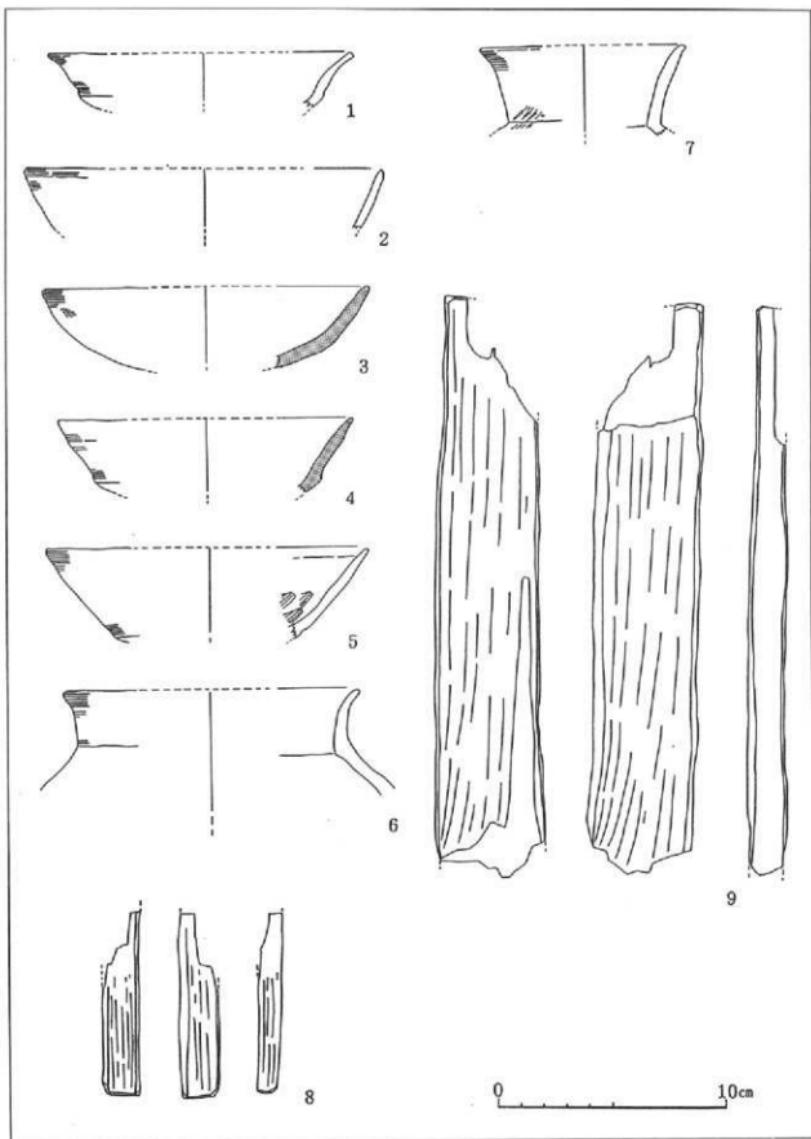
また、内湾ぎみに立ち上がり、頸部内側に稜をもち、口縁部が外反するも（第12図-5）なども出土している。

甕は、いずれも小破片となっており、器形の全体を把握できるものはないが、胴部は比較的球形を呈し、最大径は胴部ほぼ中央にあるものと考えられる。胴部表面に斜位のハケ目が認められるものもあり、口縁部は、くの字状に外反するも（第12図-7）と、頸部が直立し、口縁部がわずかに外反するも（第12図-6）とがある。ほかの器種については、いずれも細片で器形の特徴を抽出できるものは認められない。

② 板状木製品

板状木製品は、第12図出土遺物実測図の8、9である。これらのうち、9は、第2トレンチ-2の調査区から出土したもので、現存長25cm、幅4.5cm、厚さ1.6cmを測る。両端は破断しているが、両側面は面取りされている。8も同調査区出土の木製品である。これらは、明確に柱穴等に伴って出土したわけではないが、同調査区からは建物跡の一部を構成すると考えられる柱穴群が検出されており、当該遺物は建築部材の一部と思われる。

第12図 出土遺物実測図



(4) 考 察

願正壇遺跡については、従前の山形県教育委員会の調査によって、先端部を尖らせた杭群が検出され、柱穴内に遺存した状態で発見されたものも多い。その後、西沼田遺跡の調査などによって、打ち込み柱による建物跡であることが確認され、願正壇遺跡の柱群も同様の性格をもつものであると考えられた。

今次の調査では、柱穴内に遺存した状態で確認されたものはないが、その配置から建物跡の一部と思われる遺構を検出し得た。柱穴内断面のアタリ等の検討から、先端部が尖った状態のものと、円柱状を呈するものとがあり、打ち込み柱と掘立柱の両者が存在したと考えられる。

出土遺物では、従前の調査時に一括して多くの土師器群が出土したが、今次調査では、その出土量は比較的少なく、細片で磨滅しているものが多く、調査区東側では、流れ込んだような状況を呈していた。器形の全体を把握できるものは全くないが、口縁部や体部の形態的特徴から、一部、引田式並行の遺物も散見されるが、体部中央下位に段をもち、口縁部が外反する一群の坏が主体を占める。時期的には、西沼田遺跡とほぼ同一の時期が想定され、古墳時代後期の当該地域の低湿地に立地した集落の様相を反映している。

今次の調査区を設定した地区は、遺物の出土状況や遺構の様相から考えて、集落の南縁に近い地域と考えられ、第1トレンチでは、ほとんど遺物の出土は認められず、従前の調査区を中心とした集落の広がりを想定することができる。今次の調査区の各トレンチでは、東に向かって堆積土層が傾斜し、落ち込んでいく状況が認められ、出土する遺物も磨滅が著しく、流れ込んだような出土状況である。本来、集落は、若干の微高地上に立地し、その周辺には比較的潤滑な低湿地が、広がっていたと思われる。耕地整理以前の地形状況についての聞き取りによると、東側一帯は、低い潤滑な状態の田であったといわれ、トレンチの土層状況と一致している。いわゆる天童低地と呼ばれる後背湿地には、微高地上に西沼田遺跡や願正壇遺跡、鍋田遺跡のような集落が点在し、その周辺には、未だ排水不良の潤滑な低湿地が広がっているという、古墳時代後期の散村的な景観を復元することができる。

4 第4調査区（塙野目A遺跡）

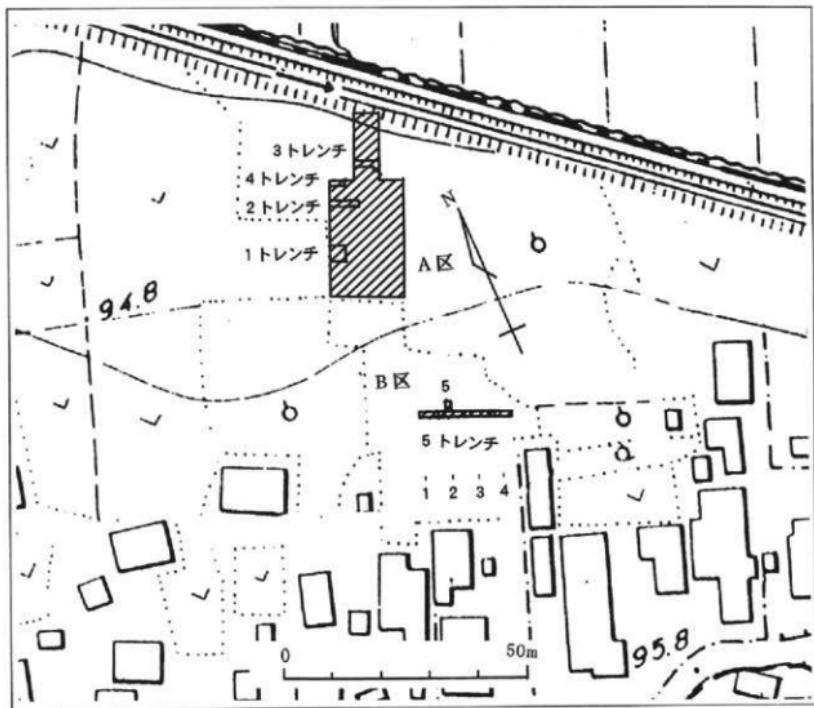
(1) 調査の概要

① 今次調査の概要

塙野目A遺跡は、西沼田遺跡より南南東へ約1.3km、塙野目集落の北側に隣接した微高地に位置し、標高95.5mを測る。この微高地は、前田川の旧河川によって形成された小規模な自然堤防であり、その流れた跡は水田として使われており、微高地は果樹園となっている。

昭和46年秋に、果樹園内の暗渠工事が行われ、地表の約1m下から土器片が出土した。出土した土器は、須恵器と土師器片で、土師器の中には、複合口縁の壺の破片や天王山式併行の弥生式土器の破片が混じっていた。このことから、ここに初期農耕集落があったことが考えられた。

第13図 第4調査区（塙野目A遺跡）トレンチ配置図



昭和47年春に、果樹植栽の際に、溝状の遺構と若干の土器片が出土したため、部分的な試掘調査が行われ、竪穴住居跡と2本の溝状遺構が検出された。上層より出土した土器は、糸切無調整の底部をもつ壺、ヘラケズリ調整の底部をもつ壺破片、刷毛目をもつ壺の破片などの須恵器、土師器であった。下層からは古式土師器を主とする壺、壇、高壺の破片が出土している。

本調査は、昭和47年春に検出された遺構が、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代にまたがる遺跡であることから、西沼田遺跡の位置する古墳時代に主眼を置いて調査を実施した。調査区をA区、B区のふたつに分け、A区に4本（第1～第4）のトレンチ、B区に1本（第5）のトレンチを設定した。トレンチは、はじめ手掘りによって粗掘りを行い、ジョレン等によって面整理を行って、遺構検出作業に入った。

A区の調査面積は24m²、B区の調査面積は22m²の合計46m²を調査した。A区第2トレンチでは、地表から30cm下のところから、土器片や鉄鐵等が出土したため、精査作業を行った。B区では、昭和47年に試掘された地点を中心に、1m×20mの東西に長いトレンチを設定し、10月24日から作業を開始した。

24日午後から市新採職員研修として16名が参加し、粗掘り作業を行った。精査作業は行わず、トレンチに3本のベルトを残して掘り下げた。トレンチの北側に昭和47年に試掘した位置が確認できたため、1m×2mの拡張を行った。その後、第5トレンチ内に、昭和47年調査時のトレンチが確認され、層位別に遺物を取り上げながら、精査作業を行った。その結果、竪穴住居跡、溝状遺構、土壤、多くのビットや柱穴を検出した。

10月26日から層序の観察等と写真撮影、平面図、セクション図等の記録作業を行った。27日は、A区では埋め戻し作業、B区では柱穴の断ち割り作業と記録作業を行った。28日にB区の埋め戻しを行い、調査を終了した。

② 昭和47年の調査概要

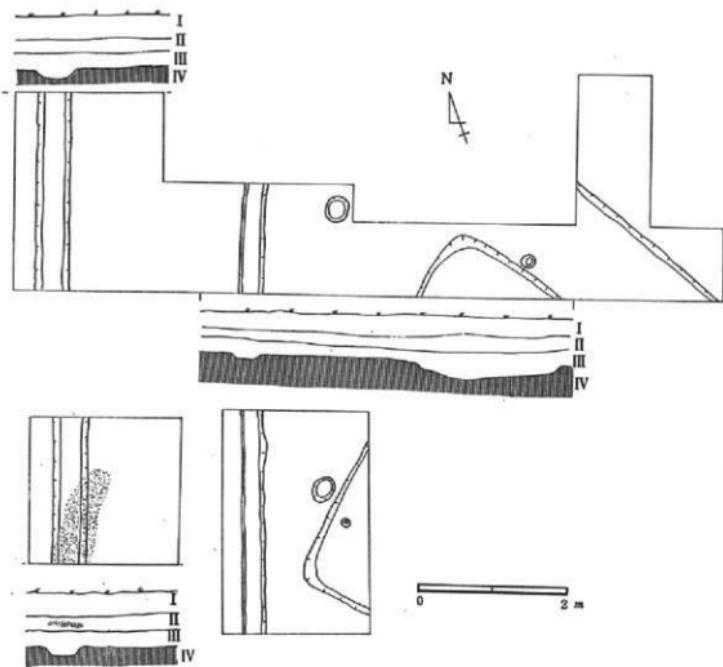
昭和47年3月末から4月5日までの期間に、川崎利夫を中心となって、山形大学歴史研究会考古部会の学生4名の参加協力を得て、部分的な試掘調査を行った。試掘した部分は畠の作物や果樹を避けて行ったことや、短期間であったために、調査面積は、30m²であった。

調査によって検出された遺構は、竪穴住居跡のコーナー部分と2本の溝状遺構である。Aトレンチの東側で、竪穴住居跡の壁面らしい落ち込みが検出された。同じくCトレンチにおいても、Aトレンチから続くと思われるコーナー部分を検出した。2つのコーナー部分を接続すれば、若干歪んだ形であるが、もし接続するとすれば、一辺5mの方形の竪穴住居跡となり、深さ10～20cm程であろうと考えられる。

Cトレンチから検出した竪穴住居跡には小ビットがあり、その中から縞文を有する薄い天王山式併行と考えられる弥生式土器が発見された。溝状遺構は、2本検出され、西側のものは幅50cm、深さ20cm前後の浅いもので、U字を呈する。それより東へ2m30cm程離れ

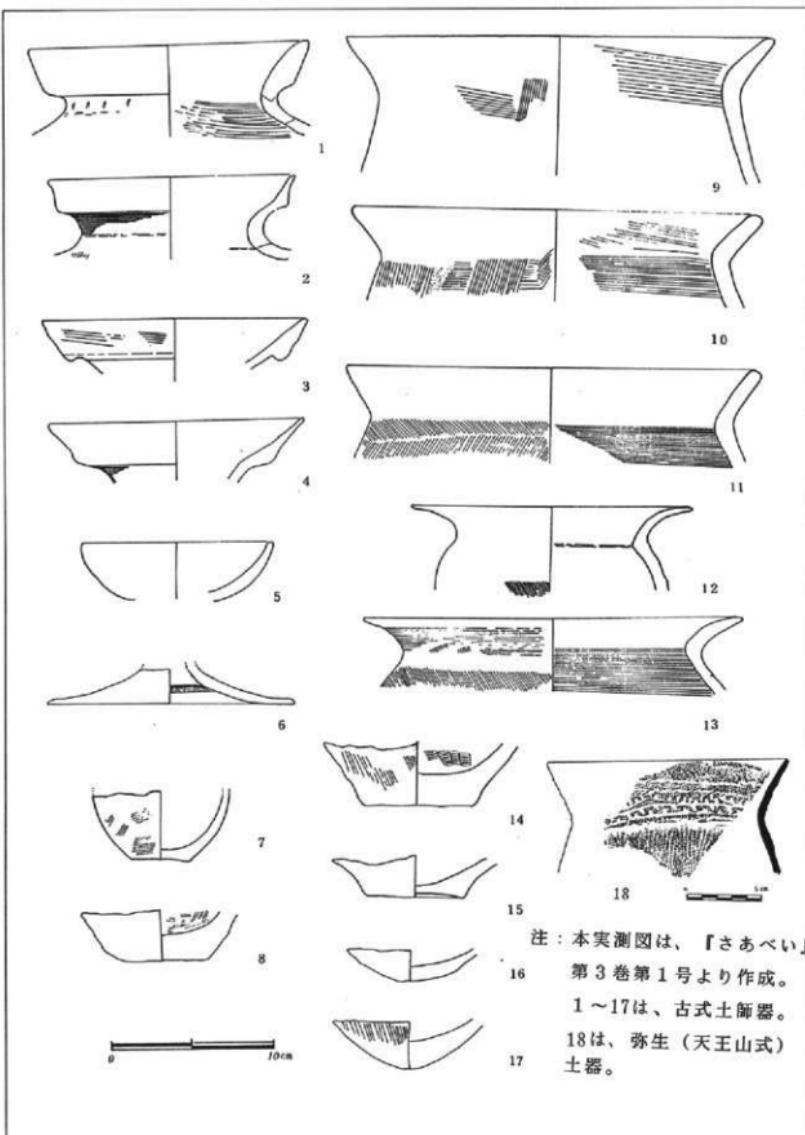
たところから検出された溝状遺構は、幅30cm、深さ10cm程のもので、両者共に南北に直行するものである。堅穴住居跡と2本の溝状遺構は、Ⅲ層下でⅣ層を掘り込んで確認され、Ⅲ層から複合口縁や「く」字状に屈曲する甕や壺、裾が広がる高坏脚部など古式土師器の特徴を示す土師器が出土している。このことから、これらは、塙釜式から南小泉Ⅱ式に相当する時期のもの、と考えられる。また、その上層からは、それよりも新しい底部に糸切り痕がある赤焼き土器の坏や、ヘラ削り調整を施した土師器坏、刷毛目や格子目、叩目文のある須恵器甕の破片が出土している。これらのことから、奈良・平安時代の遺構も存在するものと思われる。

第14図 塚野目A遺跡遺構図（昭和47年調査）



『天童市史 別巻上』(1978)より転載

第15図 塚野目A遺跡出土古式土師器及び弥生（天王山式）土器



注：本実測図は、『さあべい』
第3巻第1号より作成。
1～17は、古式土師器。
18は、弥生（天王山式）
土器。

(2) 遺構

調査の結果、A区では北側に向かって傾斜している地形的な古環境を確認し、B区では堅穴住居跡3棟、溝状遺構4条、土壙1基、ピット37基を確認することができた。しかし、調査期間が短かったことや、果樹や畑の作物栽培の関係から遺構の全容を把握することができなかった。そのため、遺構の確認は土層断面のみで行ったものや、平面プランのみの確認で調査を終了せざるを得なかった。

< A 区 >

A区の精査面積は24m²である。東西に長く4本のトレンチを設定し、南側から順次番号を設けた。第2トレンチ、第3トレンチでは樹木による擾乱や樹木を埋めた穴があり、地表から約32cm程掘り下げてみると遺構は確認できなかった。第3、第4トレンチでは北側に向かって傾斜している旧地形に20cm程盛り土していることが確認され、B区からA区にかけて少しずつ傾斜していたという地形的な古環境であったことがわかった。A区から出土した遺物は赤焼き土器、須恵器片であり、一部B区からの流れ込みによるものでないかと考えられる。

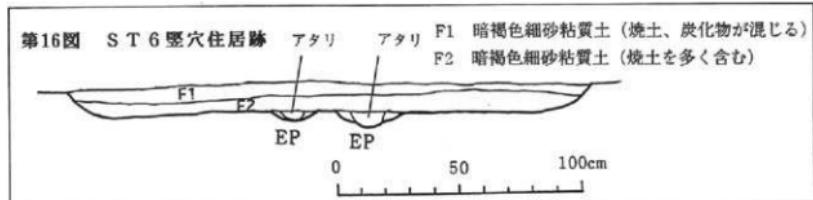
< B 区 >

B区の精査面積は22m²である。東西に細長く1m×20mのトレンチを設定し、遺構確認のため精査を行い、第5トレンチー1から溝状遺構がⅢ層下面で確認され、第5トレンチー2から第5トレンチー3にかけて堅穴住居跡のプランがⅢ層下面で確認できた。その東側にⅡ層を掘り込んで作られた土壙があり、第5トレンチー4では昭和47年に調査したトレンチが確認できた。

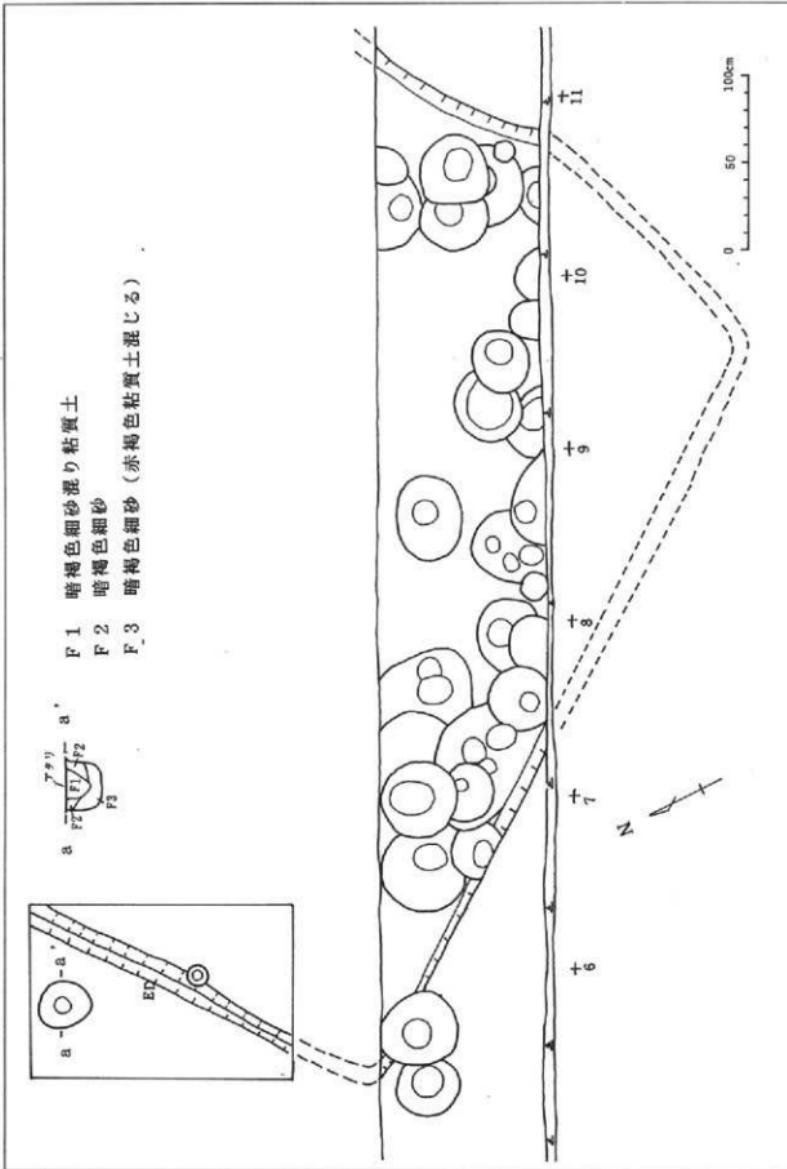
① 住居跡

S T 6 (第16図)

第5トレンチー2で土層断面により確認されたが平面プランは把握できなかった。Ⅲ層直下から深さ12.5cm、東西210cmでピットを有する堅穴住居である。覆土は、F1は暗褐色細砂混じりの粘質土で焼土と炭化物が混じっており、F2は暗褐色細砂混じりの粘質土で底面に部分的であるが焼土を多く含み、炭化物が混じっている。F2を掘り込んでE P7、E P8の柱穴があり、E P8には炭化物を多く含んでいる。東側の立ち上がりにある黒褐色シルトのSD9を切ってその上に作られている。



第17図 ST13 壓穴柱層



S T 13 (第17図)

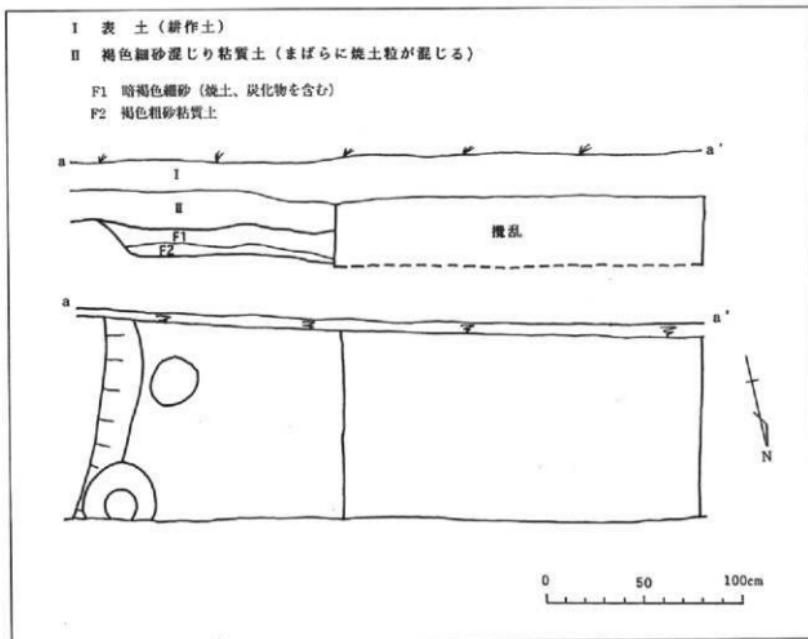
第5トレンチ-2で検出し、昭和47年調査のCトレンチで検出した竪穴住居跡と接続するものである。IV層を掘り込んでおり、確認面が床面より10cm上面で検出している。規模は5m×5mの方形を呈し、南北軸方位はN-18°-Wである。壁はほぼ直線的に傾斜し、西北の一帯に幅8cm、深さ約10cm程の周溝がめぐる。柱穴は3期の切り合いがあり、どの柱穴がS T 13に合うものかまでは未確認であった。

出土遺物はⅢ層下面、覆土上面に多く、その中に複合口縁の特徴をもつ壺口縁部の破片や脚部が中膨らみ中空で裾が大きく外反する高环が出土していることから、塙釜式の後半から南小泉式併行する竪穴住居跡と考えられる。

S T 15 (第18図)

第5トレンチ-4で土層断面により確認されたが、平面プランは把握できなかった。II層直下から確認されたもので深さ15cmを測る。覆土はⅢ層と異なり、F 1は暗褐色細砂で焼土と炭化物を含み粘土質が少ない土質、F 2は褐色粗砂混じり粘質土である。東側で南北に伸びる平面プランとピットが確認されたが西側は擾乱によって確かめられなかった。

第18図 S T 15 竪穴住居跡

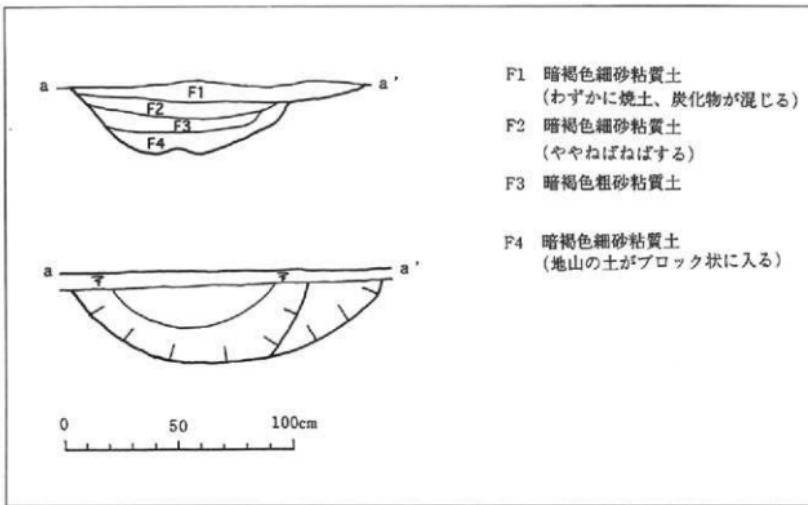


② 土 壤

S K 1 4 (第19図)

第5トレッサー3の南端でⅡ層より掘り込んでいる土層断面を確認し床面より少し上面において平面プランを確認した。東西1.34m×南北3.8m以上の不整梢円径を呈する東西に長軸をもつ土壤である。深さは34cmを測り、覆土のF1-暗褐色細砂混粘質土でわずかに焼土と炭化物が混じり、底面は丸底で覆土は4層からなる。

第19図 S K 1 4 土壌



③ 溝状遺構

S D 1、S D 2

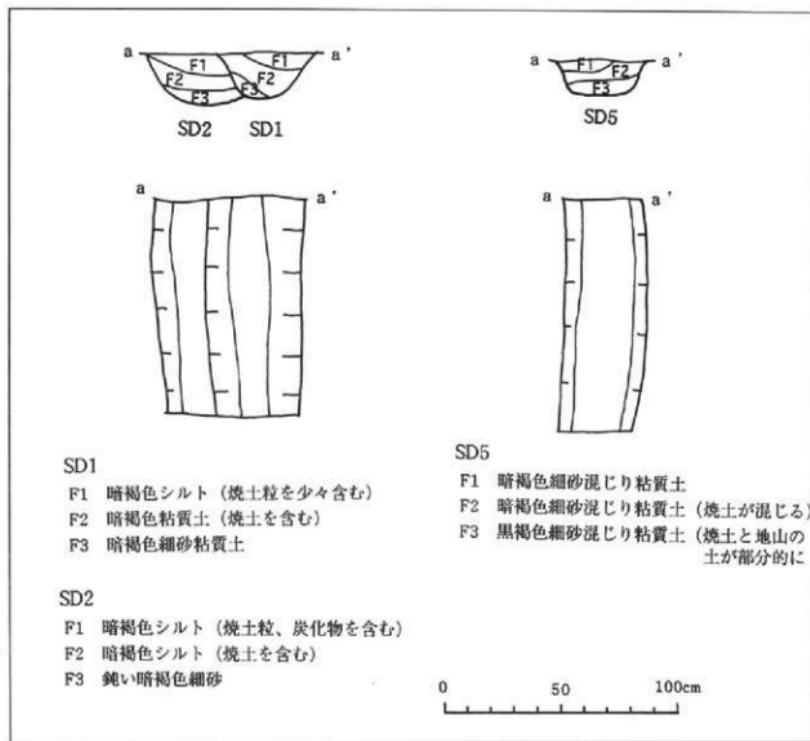
S D 1、2共にⅢ層下で確認した溝跡で、S D 2を切ってS D 1が作られている。S D 1は幅40cm、深さ17cmで浅いU字形を呈する南北に直行するものである。覆土は3層からなり、F 3に細かい砂と焼土があり、各覆土にも少し焼土粒が混じっている。

S D 2は幅35cm以上、深さ20cmを測り、覆土はF 1に焼土と炭化物が少し含まれ、F 2に焼土が多く含まれている。S D 2とS D 1は、大幅な時期差がないものと考えられ、出土遺物から南小泉Ⅱ式から西沼田遺跡の6世紀頃のものであると考えられる。

S D 5

S D 5はⅢ層下から確認された溝跡で、幅35cm、深さ16cmを測り、覆土は3層からなりU字を呈する浅い溝である。南北に直行する溝跡でS D 1、2と並行である。

第20図 SD1、SD2、SD5 溝状遺構



SD9

ST6の東端でボール状に半円形を呈する溝で幅30cm深さ19cmを測るものである。SD9は黒褐色シルト層でST6から切られている。

④ ピット

ST13のプランの中に28基のピットが存在するものの、どのピットが堅穴住居跡の柱穴になるのかは明確にできなかった。また、全部のピットのプランが必ずしも柱穴と断定できない。

(3) 遺 物

① 土 器

本遺跡の出土遺物は一部を除きほとんどが小破片である。そのため、主に図上復元によつて実測を行つた。また、その多くは包含層より出土したものである。総数 573 片であつた。

(a) 弓生土器

第 5 トレンチ - 2 の包含層から 1 片と、北側ピットを半裁した際に、縄文を地文とする小破片 1 片が出土している。

(b) 古式土師器

ほとんど小片で B 区に多く分布していた。実測できたものは 7 点にすぎない。また、出土層位もⅢ 層からのものが多く、遺構内出土遺物はない。土師器は高坏、壺、甕などの器種が出土しており、破片総数 286 片である。

高坏は脚部片で、中膨らみ中空で、裾部は大きく外反して開く。脚外面はミガキとナデ調整が施されており、内面に輪積み痕が少し残っている（第22図-2,3）。

壺は口縁部が肥厚でいわゆる複合口縁の破片で、頭部が屈曲し外反して中央に顯著な稜線をもつものである（第22図-1）。

A 区第 2 トレンチと B 区第 5 トレンチ - 2 より、各 1 点出土している（第22図-10,11）。甕は、口縁部が明瞭に「く」字状に屈曲してゆるやかに外反するもので、体部の外面は刷毛目の線を施されているもの（第22図-4）と、口縁部が丸みをもつて外反し、口唇が内反するもの（第22図-5）の 2 つのタイプがある。底部にアジロ目をもつものと、底部がΩ状に少し中央部が窪んでいるものがみられる。

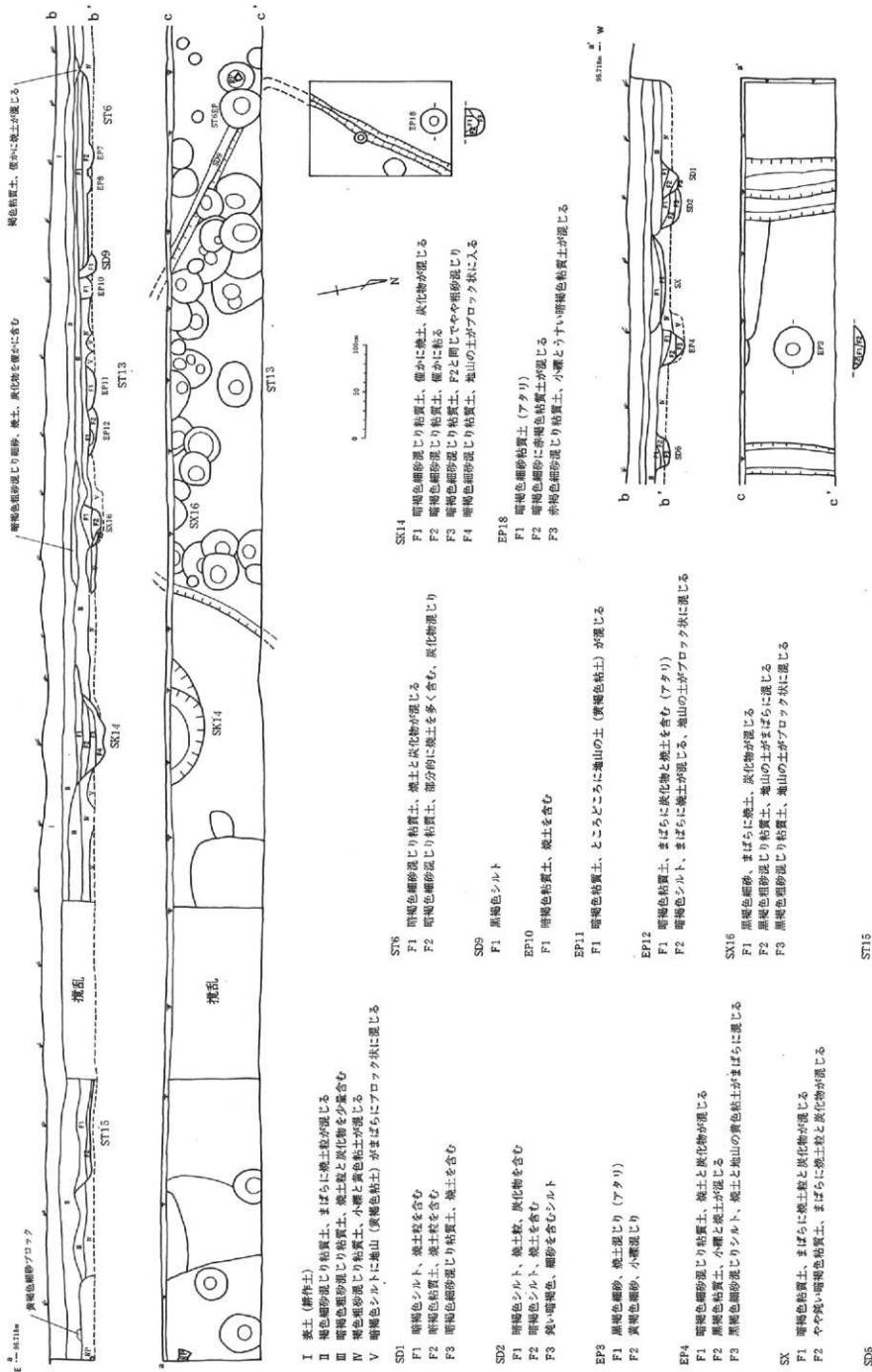
(c) 須恵器

A 区より出土数 21 片、B 区より出土数 2 片が出土している。そのうち須恵器坏は回転糸切り無調整で、体部は底部から直線的に外反するもの（第22図-6）と、丸みをもつて立ち上がるタイプがある（第22図-7）。須恵器では、ほかに壺の口縁部片 1 点（第22図-8）と、高台付の壺 1 点も出土している（第22図-9）。

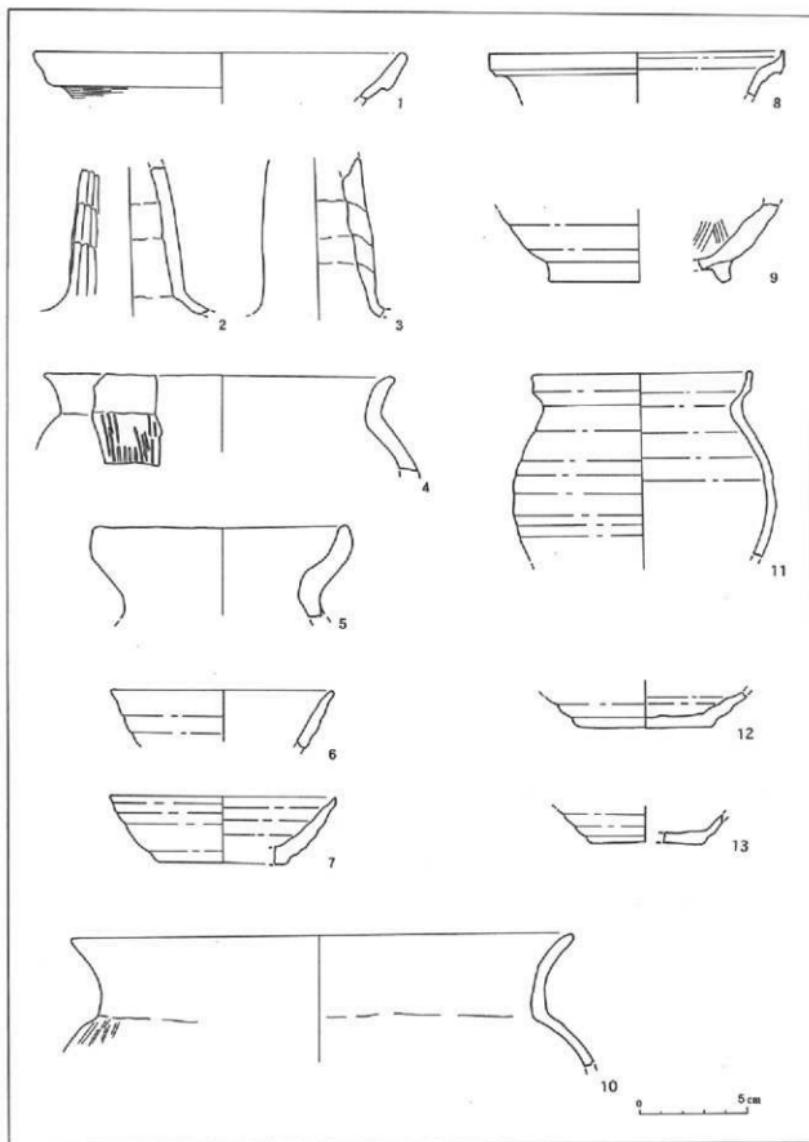
(d) 赤焼き土器

A 区第 4 トレンチより 26 片、B 区第 5 トレンチ II 層より少量の出土がある。坏は回転糸切り無調整で、底部より丸みをもつて立ち上がるタイプである（第22図-12,13）。

第21図 第4調査区 5トレンチ平面図及び土層断面図



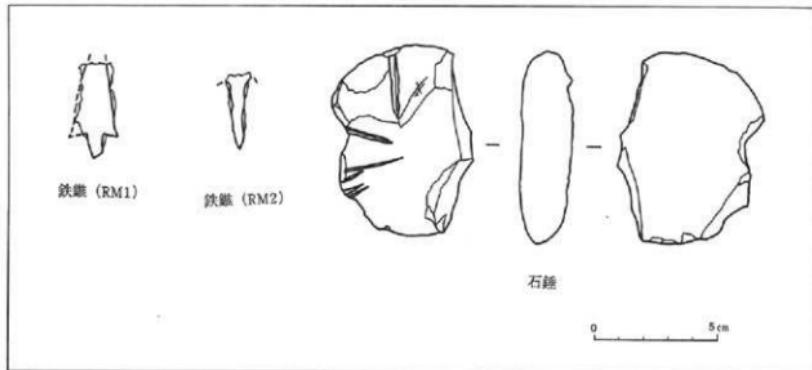
第22図 塚野目A遺跡出土土器



出土土器計測表 (単位: cm)

| | 出土地 | 種別 | 器種 | 口径 | 底径 | 高さ | 体部径 | 備考 |
|----|---------|------|----|------|-----|---------|------|--------------|
| 1 | B区5トレー2 | 土師器 | 壺 | 17.2 | — | — | — | 複合口縁 |
| 2 | * | * | 高壺 | — | — | (現存)6.7 | — | 中膨れ中空 |
| 3 | * | * | * | — | — | (タ) 7.3 | — | * |
| 4 | B区5トレー1 | * | 壺 | 16.2 | — | — | — | ハケ目 |
| 5 | B区5トレー2 | * | * | 11.7 | — | — | — | 内側に朱付着 |
| 6 | A区4トレンチ | 須恵器 | 壺 | 10.4 | — | — | — | |
| 7 | A区2トレンチ | * | * | 10.5 | 6.0 | 3.1 | — | RPS 回転糸切り無調整 |
| 8 | A区4トレンチ | * | 壺 | 13.7 | — | — | — | |
| 9 | A区2トレンチ | * | * | — | 8.5 | — | — | 回転糸切り |
| 10 | A区2トレンチ | 土師器 | 壺 | 23.2 | — | — | — | RPI ハケ目 |
| 11 | A区 | * | * | 10.2 | — | — | 12.2 | ロクロ |
| 12 | A区2トレンチ | 赤燒土器 | 壺 | — | 6.6 | — | — | 回転糸切り |
| 13 | B区5トレー2 | * | * | — | 5.5 | — | — | * |

第23図 鉄製品及び石製品



② 鉄製品

鉄鏃がA区第2トレンチより1点、B区第5トレンチー1より2点の計3点出土している。B区の出土層はII層下面で地表からの深さは30cmである。剥抉平根式の鉄鏃で、1は現存長4cm、茎の幅1.8cmのもので、2は鎧代のみで現存長3cm、茎の幅1.2cmである。A区出土のものは小破片であった。

③ 石製品

B区第5トレンチー1より出土した石錐で扁平な円錐の両側から打ち欠いたもので、片面に刃物を研いだと思われる刃の跡がつけられている。

剥片1点がA区第3トレンチのIII層より出土している。

(4) 考 察

今回の調査によって塚野目A遺跡から部分的な検出を含め、堅穴住居跡3棟、溝状遺構3条、土壙、ピットなどの遺構が検出された。時期的には、地山面に弥生時代後期の天王山式併行期の土器片が出土しており、古墳時代前期の埴輪式から南小泉II式併行期の遺物を床面ないし包含層より出土している。また、平安時代前～中葉頃の遺物も多く含んでおり、遺構からみれば古墳時代から平安時代まで長期間に渡っており、遺物からは弥生時代後期から平安時代までの変遷が考えられる。

弥生時代の土器はB区の第5トレンチー5の昭和47年にプランを検出したピットを半裁した時に、その覆土底面から出土したもので、地山面を掘り込んだところより検出できたが、破片1片にすぎず、特定できない。

古墳時代前期の遺構は、ST6、ST13の堅穴住居跡や溝状遺構3条などが検出されている。堅穴住居跡は一辺が5m程度の方形プランで、口縁部が複合口縁で「く」字状に外反する壺の小破片や中膨らみ中空で壺が大きく広がる脚部の高杯などの遺物が出土していることから、時期的に東北地方南半の埴輪式後半から南小泉II式の時期であろう。

平安時代の遺構は第II層下面より掘り込んでいるST15で、II層及び覆土から須恵器、壺の破片や赤焼き土器の壺、甕などロクロを使用している土器が出土し、壺は底面に回転糸切り無調整で器高が低いタイプなども含まれている。

鉄鎌は包含層より出土したもので、層位から考えれば平安時代のものと考えられ、削抜(てっけつ)平根式の鎌身で両刃のタイプである。

西沼田遺跡より古い時期の遺跡であり、立地から考えれば塚野目A遺跡は西沼田遺跡よりも少し高い位置にあることから、堅穴住居を営むことができたのであろうと推察できる。遺跡の範囲は、西沼田遺跡よりも小さな集落であったと考えられ、古墳時代の遺物が散布する面積も小範囲である。ただ、生活環境から考えれば、やや高い位置にあり生活しやすい場所であったため、古墳時代に限らず、平安時代になっても生活が営まれたものであろう。

今回の調査では、時間的な制約と果樹、作物を避けての部分的な発掘調査となつたため、遺構の完掘ができず、遺構の全体をとらえることができなかつた。また、遺物についても層位別、遺構別に正確な取り上げが不可能であった。

<引用・参考文献>

- 1 川崎利夫 「天童市塚野目A遺跡の古式土師器」 『さあべい』 3-1 昭和53年

IV 調査のまとめ

昨年の西沼田遺跡の調査によって提起された課題のひとつは、山形盆地における集落形態のあり方についてであった。すなわち、灌漑技術など土木水利の発達段階に規定されて、5～6棟の住居と附属する建物によって、ひとつの集落が構成されることを指摘した。西沼田もそれらの単位集落のひとつであり、まわりには、このような集落が散村状に分布する事実についても触れた。（「西沼田遺跡発掘調査概報」 1994 天童市教育委員会）

このたびの調査は、これらの周囲に散在する集落の分布状況を把握することにおかれた。

西沼田遺跡をはじめとする山形盆地の古代前期の集落遺跡は、奥羽山系より流下する河川の扇状地末端の湧水帯に位置し、最上川の後背湿地帯を水田としての生産の場としている。西沼田遺跡の周辺に分布する願正塙・鍋田・清池・清池清水・原口など天童市内の古墳時代集落に共通した立地条件にある。立谷川を越えた山形市域の宮町・嶋・今塚・谷柏、さらに乱川の北の東根市域の扇田遺跡なども同様である。

山形盆地の中核部である乱川と立谷川による複合扇状地で、西は最上川によって画された天童市西部の成生・蔵増・高瀬・寺津などの旧村は、すでに11世紀に振闇家領として成立をみた「成生莊」の生産の基盤をなす穀倉地帯であった。そのような条件がいつ整えられたか、初期水稻農村の成立の様相をさぐり、その頃の景観や環境を把握することもこの度の課題であった。

西沼田遺跡の北東に位置する第1調査区では、古い道路の存在が確認されたが、湿地帯をなし、古墳時代の集落立地としては不適当であることがわかった。

同じく南東に位置する第2調査区においては、微高地が湿地や旧河道に接する部分で、2列に続く杭列が発見されたが、土留めに設けられた杭列であり、古墳時代のものとは認められず、新しい時期のものであろうと考えられる。これらの地点は、木材片などが出土した、との聞き取りをもとに試掘を実施したものであるが、集落としては西沼田の近くの地点であり、古代の集落としては存在に疑問があったが、調査の結果においても同時代の遺跡ではないことがわかった。

第3調査区の願正塙遺跡は、西沼田遺跡より約1km西に位置する古墳時代後期の集落遺跡である。1983年（昭和58年）圃場整備に伴い山形教育委員会によって発掘調査が実施され、805m²が精査され、7世紀前後の栗田式に併行する土師器多数と少量の須恵器、8世紀以降の土器が発掘された。（「願正塙遺跡発掘調査報告書」 1984 山形県教育委員会）遺構は、溝跡・土墻・柱穴などが検出されたが、建物跡と断定すべきものは検出されなかつた。

この度の調査は、遺跡がさらに広がることを確かめ、建物跡の一部の発見を目あてに集落跡であることを確認するために、トレンチによる調査を実施した。

83年度に調査されたB区南側より、土師器破片とともに建物跡を構成する東西2間、南

北1間以上の掘立柱が発見され、これはもっと拡大する可能性がある。また、別の地点では、住居跡内部に貼り床を施した痕跡も確認され、その他の柱穴群もあり、明らかに住居を含む建物群が存在したことが、認められるに至った。柱穴には、打ち込み式のものもあるが、掘り方を伴い、柱痕が確かめられるものもあった。したがって願正塙遺跡は、もっと南に広がる集落遺跡であることが明らかになった。

第4調査区の塚野目A遺跡は、西沼田遺跡の南東750mにあり、やや微高地上に位置する。1972年に小発掘が行われている。（「天童市史 別巻上 地理・考古編」 1978 天童市史編さん委員会）その結果、古墳時代前期の隅丸方形の竪穴式住居の一部や、それを囲む溝跡や、複合口縁の壺など4世紀代の土師器を伴って出土している。

このたびの調査は、台地縁辺部のA区と、以前に発掘されたB区に、トレントを設定して行われた。A区において、遺構は発見されなかつたが、B区では上層より奈良・平安時代の遺物と、住居跡の一部や土壤らしい落ち込みが土層断面から観察された。下層からは竪穴住居跡の一部、土壤、溝跡などが検出され、若干の古式土師器も採取されたが、遺構の完掘までには至らず、今後の調査に委ねられることになった。

塚野目A遺跡が、古式土師器を出土する古墳時代前期の遺跡であることは知られていたが、弥生後期の天王山式の土器破片が発見されていることは、当地域における初期水稻農耕の起源や、弥生文化から古墳文化への移行の問題を考える上で、極めて重要である。

また、この遺跡は、弥生・古墳・奈良・平安時代と、古代の人びとが居住した地域であることが明らかであるが、それが連続的であるのか、中途で居住を他に変えた時期もあったのかは、これから突き止めなければならない課題である。

発掘は、トレントを主とした小規模なものであったが、古式土師器と5・6世紀の土師器、さらに奈良・平安時代の土器も混在することは興味深い。さらに現集落の東から、箱式石棺が発掘されていることは、この近くに多くの塚が、かつて存在したとの伝承や「塚野目」の地名とも相まって、集落跡との関連を、今後追求しなければならない。

このあたりも扇状地末端にあたり、澆水地を利用し、蓄水と排水に意を注いだ初期水稻農業の立地として適した地域である。願正塙遺跡とともに、この塚野目A遺跡も、西沼田遺跡と同様の散在する小集落群の一部であったことが、このたびの調査によって明らかになった。

初期農耕の時代から連続として千数百年に渡って続き、人びとの生活を潤し、計り知れない豊饒さをもたらしたこの地域にも、時代の要請による道路建設などの開発の波が押し寄せ、大きく変貌の一途をたどろうとしている。古代までさかのぼる多くの遺跡を事前に調査し、祖先の息吹きや工夫に満ちた生活と労苦の跡を後世に伝えることは、現代に生きるわたしたちの責務であると考える。

引用・参考文献

- ・『天童市史別巻上』地理・考古篇 天童市 1987
- ・『西沼田遺跡発掘調査報告概報』 天童市 1995
- ・『山形県埋蔵文化財調査報告書101集 西沼田遺跡発掘調査報告書』
山形県教育委員会 1986
- ・『願正塙遺跡調査説明資料』 山形県教育委員会 1983
- ・『願正塙遺跡発掘調査報告書』 山形県教育委員会 1984
- ・『さあべい』3-1 「天童市塚野目A遺跡の古式土師器」川崎利夫 1987

図 版

図版 2 第1調査区
(西沼田遺跡北東
樹園地) 遠景



図版 3 テストピット3
の精査



図版 4 テストピット
3 の土層断面
図



図版 5 第2調査区（西沼田遺跡南東樹園地）遠景



図版 6 第2調査区の土層



図版 7 第2調査区のビット



図版8 第3調査区
(顕正塙遺跡)
遠景



図版9 第3調査区
表土剥ぎ作業



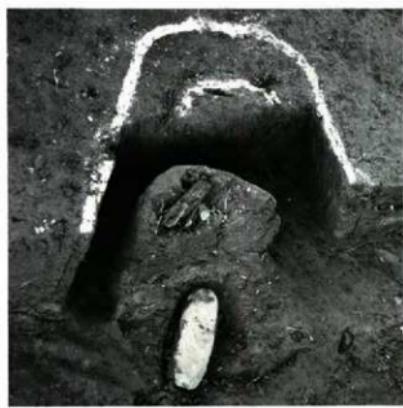
図版10 第3調査区第2トレ
ンチ遺構検出作業



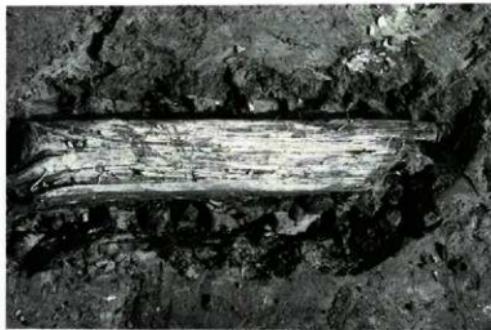
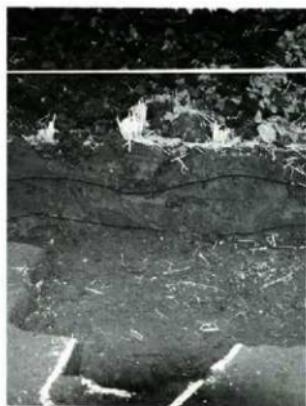
図版11 第2トレンチ内の住居跡



図版12 第2トレンチ柱穴と木製品及び根固石



図版13 第2トレンチ土層断面



図版14 第2トレンチ出土の木製品

図版15 第3調査区
(顕正塙遺跡) 遠景



図版16 遺跡と作業の
説明



図版17(左)第4調査区
A区グリット
配置状況



図版18 A区出土の土師
器 (RP4)





図版19 第4調査区B区
調査区の設定

図版20 B区の表土剥ぎ
作業



図版21 市職員研修の発
掘作業(10月25日)





図版22 (左上) B区西側の遺構検出
図版23 (右上) B区東側の遺構検出

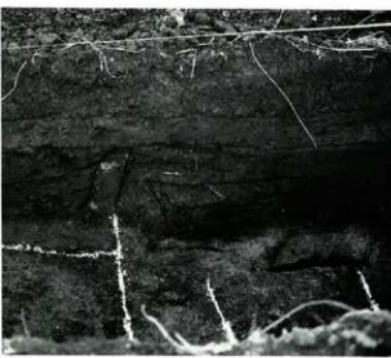


図版24 B区西側の溝状遺構



図版25 (左下) B区SD5の土層
断面

図版26 (右下) B区SD1、SD
2の土層断面





図版27 B区SD9とS
T6の土層断面



図版28 B区ST15の
土層断面



図版29 B区EP18及びST13

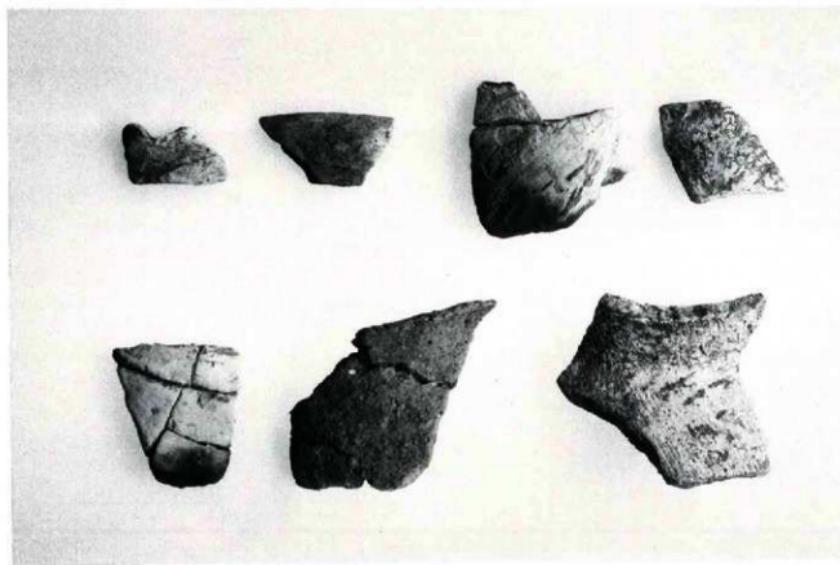
図版30 B区SK14土層断面





図版31 塚野目A遺跡B区土師器の出土状況

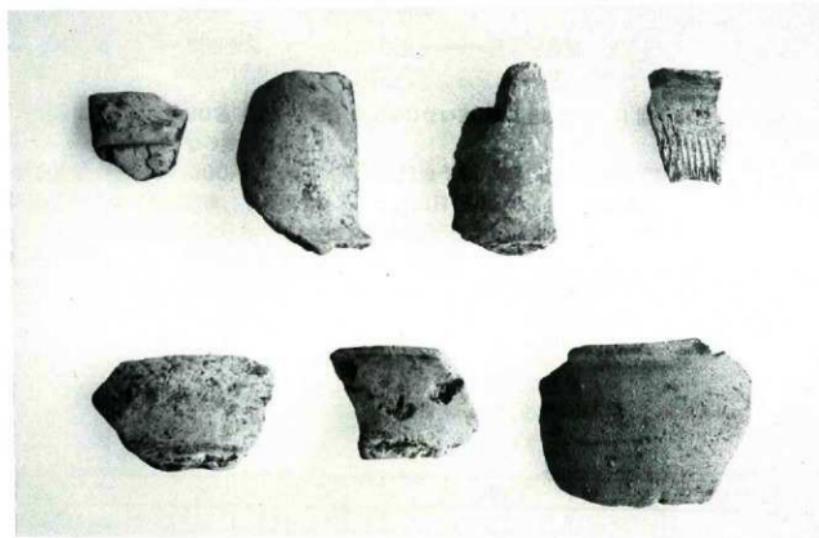
図版32 願正塙遺跡出土の土師器





図版33 顕正塚遺跡出土の木製品

図版34 塚野目A遺跡A・B区出土の土師器





図版35 塚野目A遺跡A区出土の須恵器

図版36 塚野目A遺跡A・B区出土の赤焼土器



図版37 塚野目A遺跡B区出土の鐵鏃

図版38 塚野目A遺跡B区出土の赤生土器



図版39 塚野目A遺跡A区出土の種子

図版40 塚野目A遺跡B区出土の石製品

報 告 書 抄 錄

| | |
|-------|------------------------------------|
| ふりがな | にしあまた いせき かんれんちゅうき日うこくし |
| 書名 | 西沼田遺跡関連調査報告書 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 天童市埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| シリーズ翻 | 第12集 |
| 編著者名 | 川崎 利夫、茨木 光裕、村山 正市、長瀬 一男、長谷川 武 |
| 編集機関 | 山形県天童市教育委員会 |
| 所在地 | 994 山形県天童市老野森一丁目1番1号 ☎0236-54-1111 |
| 発行月日 | 西暦 1996年3月31日 |

| 所取遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東經 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|---|------|-----|------|-------------|--------------|-----------------------|------------------------|--------------------------|
| | | 市町村 | 地番番号 | | | | | |
| 第1調査区 天童市大字矢野 め あざぬまた 目字沼田 | 6210 | | | | | 19951016～ 19951028 | (159) | 史跡の保存・ 整備計画の調整に伴う発掘調査 |
| 第2調査区 天童市大字矢野 め あざぬまた 目字沼田 | | | | 38度 21分 28秒 | 140度 20分 54秒 | | 5 | |
| 顕正墳遺跡 天童市大字藤内 しんでんあざかいどうした 新田字街道下 | | | | 38度 21分 23秒 | 140度 20分 59秒 | | 3 | |
| 塙野目A遺跡 天童市大字塙野 め あざきしめ め 目字岸野目 | | | | 38度 20分 55秒 | 140度 21分 00秒 | | 105 | |
| | | | | | | | 46 | |

| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|--------------------------------|-----|-----------------|---|--|--------------|
| だい ちょうさく 第1調査区 | | | 古道 | | 遺物の出土がなく時期不明 |
| だい ちょうさく 第2調査区 | | | 杭列跡 | 木材(土留め用) | |
| がんしょうだんいせき 願正塙遺跡 | 集落跡 | 古墳時代 | 張り床状遺構 (1軒) 掘立柱住居跡 (1軒) 柱穴群 | 土師器片(多數) 須恵器片(1片) 板状建築部材片(2片) | |
| つかの め い 塚野目A遺集落跡 es 跡 | | 古墳時代 奈良・平安時代 | 竪穴住居跡(3軒) 溝状遺構(4軒) 土壤(1基) ピット群 | 弥生土器片(2片) 古式土師器片(数片) 須恵器片(23片) 赤焼き土器片(約30片) 鉄鏃(3点) | |

西沼田遺跡関連発掘調査報告書

印 刷 平成 8 年 3 月 25 日

発 行 平成 8 年 3 月 31 日

発 行： 山形県天童市教育委員会

山形県天童市老野森一丁目 1 番 1 号

☎ 0236-54-1111 ☎ 994

印刷所： (有) 昭報社印刷

山形県東根市大字若木字七瀬 5555-8

☎ 0237-48-2345 ☎ 999-37
